

# LA REVUO ORIENTA

1934

エスペラント研究

JARO 15 N-RO 1

N O V E M B E R

1 9 3

JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO



Apud—Preter (8) .....	小坂 狷 二	307
エスペラントの冠詞.....	前 田 勤	309
日本詩歌のエス譯について (8).....	松 葉 菊 延	311
La notoj pri la disflora dato de ĉerizoj en Japanujo .....	田 口 龍 雄	314
Por serĉi la trezoron (3) .....	多 田 ツ ヤ	317
新刊紹介.....		320
内地報道.....	編 輯 部	325
關西地方風水害の御見舞.....		334
第十五回赤十字國際會議への宣傳.....	編 輯 部	335

我國に於けるエスペラント普及・研究・實用の中心機關

財團 日本エスペラント學會

法人

東京市本郷區元町一の一三  
—【電話小石川(85) 5415 番 — 振替口座東京11325番】—

世界エス運動の中心機關萬國エスペラント協會(UEA)に對し我國を  
代表する本會に入會され我國のエス運動を援助せられよ

目 的	エスペラントの普及、研究、實用
事 業	(a) エスペラントに關する各種の研究調査及其發表 (b) 雜誌及圖書の刊行及外國エス語書籍の取次 (c) 講演會講習會の開催及後援 (d) 其他本會の目的を達成するに必要な事業
會 費	(a) 普通維持員 年額2圓40錢 (b) 正維持員 年額3圓 (c) 贊助維持員 年額5圓 (d) 特別維持員 年額10圓以上 (e) 終身維持員 一時金100圓以上
維持員へは	La Revuo Orienta を無代配布する他當會發行新刊圖書の割引等をなす ことあり
本 會 の	普通維持員を除く他の維持員はすべて萬國エスペラント協會(UEA)の 普通會員 (simpla membro) となる
入 會 手 續	住所 職業 姓名(振カナ付)を明記し會費一年分を支拂へばよい

會則及發行及取次内外圖書目錄要郵券二錢

役 員 名 簿 (五十音順)

理 事 長 大石 和三郎	同 藤 澤 親 雄	理 事 (常任) 美野田 琢磨
理 事 秋 田 雨 雀	同 醫 博 望月 周三郎	監 事 清 水 勝 雄
同 井上 萬壽藏	同 柳 田 國 男	同 鈴 木 正 夫
同 中大教授 川原 次吉郎	同 (常任) 上 野 孝 男	同 堀 眞 道
同 文 博 黒 板 勝 美	同 (長) 大 井 學	顧 問 法 博 穂 積 重 遠
同 東 部 部 長 土 岐 善 麿	同 (同) 小 坂 狷 二	同 子 爵 三 島 章 道
同 醫 博 西 成 甫	同 (同) 三 石 五 六	



## LA REVUO ORIENTA

Monata Organo de JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO, Hongoo-ku, Motomači I, TOKIO, Japanujo

## APUD—PRETER

X-I Prepoz.]

( 8 )

K. OssaKa

II. PRETER, *Daŭrigo*

c) **PRETERVETURI, PRETERGLITI,**  
ks.

Poste ŝi *preterveturis* grandan ĉerizarban ĝardenon. (FII 56/27)

それから大きな櫻の果樹園のそばを（乗つて）通つて行つた。(ankaŭ vd. Rn 7/14)

En Danujo staras malnova kastelo, nomata Kronborg, kiu troviĝas tute ĉe la Sundo, kie la grandaj ŝipoj ĉiutage grandnombre *preterveturas*. (FII 1(9/2))

丁抹にクロンボルクと云ふ古城があつた、その城は毎日澤山大きな船舶が行きかふ、スンド海峡にすぐ臨んで居るのであつた。

Ŝi *preterdancis* preter unu pordo.

或る戸口の前をおどつて通つた。(FII 101)

Du kaleŝoj kun furioza rapideco *pretergalopis*. (FII 113/2)

馬車が二臺えらい速さでそばを駆けぬけて行つた。

Tio estis la hirundo, kiu ĝuste tiom *preterflugis*. (FI 31/23)

それは丁度其の時そばをかすめて飛んで行つた燕であつた。

La viro elkuris sur la straton, *ĵetante preterflugantan rigardon* sur la virinon.

男は往來へ駆け出して行つた、その婦人をチラリと流し目に見乍ら。(M 195/11; ankaŭ vd. M 215/-5)

Ŝi ne sciis, aŭ ŝi nur pase, *preterfluge* apenaŭ ion aŭdis, pri tio, ke kio estas permesata al Jupitero, ne estas premesata al bovo. (M 34/4)

ユピテル神（ギリシャ諸神の主神=Zeŭso）に許される事は牛馬には許されないのだと云

ふ事を彼女は知らなかつたかさもなくばぼんやりと聞き流して耳にとめてゐなかつたのだ（貧富貴賤のちがひを知らなかつた）。

Tio estis Nova Holando, kiu *preterglitis* kun perspektivo de la bluaj montoj:

それは新土和蘭陀でその青い山々の景色を負ふて眼前を亡つて行つた。(FI 123/-5)

ĉ) **PRETERŜOVI** そばを押し進めて通る; sin *preterŝovi*, *preterŝoviĝi* そばを（押し）通つてゆく。

Per paŝo serioza kaj majesta.

Ne rapidante, ĝi sin *preterŝovas*.

嚴肅にして堂々たる武歩でゆつたりとハムレット王の幽霊 (ĝi=la spirito) は目前を通つてゆかれた。(H 18/8)

Ili ne donis eĉ la plej malgrandan atenton al la virino, kies funebra vesto *preterŝoviĝis* antaŭ ili. (M 21)

彼等はその喪服がすれすれに目の前を通つて行つた婦人に目も呉れなかつた。

[註] doni la atenton al=direkti la atenton al (M23)=turni la atenton al 注意を向ける。

La scenoj, kiuj en la lastaj minutoj *preterŝoviĝis* antaŭ ŝiaj, okuloj, faris sur ŝia spirito fortan impreson.

今の今しがた眼前に展開して行つた光景は彼女の心に強い印象を與へた。(M27) [ankaŭ vd. M 198/2]

Krepuske ĉi tiuj bildoj *preterŝoviĝis* antaŭ la animo de la bela virino.

薄ぼんやりと此等の光景はこの美人の心をかすめて通つた。(Rn 17/-13)

Dramo el la vivo *preterportiĝas* antaŭ ŝia spirito. (FII 116/2)



その生涯中の場面が心によみがへつた。

(preterportiĝi=sin preterporti).

d) **PRETERFROTI** 行きずりに觸はる。

Ŝi evitadis la manojn de la pasantoj, ŝi *preterfrotadis* ilin, sed tamen forkuris. (M 234/-7)

彼女は通行人の（捕へやうとて出した）手をかわして行つた、手先にかすめて觸れることはあつたが兎に角逃げて行つた。

e) **PRETERLASI** 通して（行かせて）やる、のがす、見のがす。

Vi, kiel ĉiu, estas ne tute sen peketoj, ĉar vi estas homo saĝa kaj vi ne amas *preterlasi* tion, kio naĝas al la manoj. (Rz)

貴兄も御多分に漏れず満更脛に疵の無い方ではこれなかる可く候、何分にも貴兄は抜け目なき質にて掌中に流れ込むものを遁がさるゝことはおすきの方にてはなしと存候。

Neniu el ili havis la deziron fari la unuan paŝon en la profundan neĝon, por *preterlasi* preter si la alian.

どちらも深い雪の中へ先へ足をふん込んで相手に道をあけて（通らして）やることはいやであつた。(FIII 26/13)

Sed nun oni malsupre solene ekkantis la dek-ok-preĝon, kiun neniu devas *preterlasi*, kaj la klopodantaj virinoj rapidis returne al siaj lokoj kaj plenumis tiun preĝon, kiel devas esti farate. (Rn 39/20)

だけど其時下の方で壯重に祈禱十八番を歌ひ始めた、この祈禱は何人も外すことは出来ぬので世話をやいてゐた女共もいそいで席に取つて返して型の如くにその祈禱を行つた。

f) **PRETERPASI** そばを通つて（去つて）ゆく、過ぎる。

Ne lasu, ke la longe atendita  
Feliĉ' apenaŭ iam esperita,  
Simile al la ombro de amiko  
Nun *preterpasu* vane, restigante  
Trioblan suferadon kaj doloron!

永らく期待したる幸福、嘗ては望みも及ばぬと思はれた幸福が三層倍の苦しみなやみをあとに残してまるで朋友の影の様に今や空しく去つてゆくのにまかせるな。(IF 56/9)

Multe la pensoj, kaj multe da bildoj

*preterpasas* antaŭ ŝi. (FII 91/3)

色々な思ひや色々な光景が彼女の眼前を過ぎ行くのである。

Tiam la Eternulo *preterpasos* la pordon kaj ne permesos al la ekstermanto veni en viajn domojn por puni. (Er XII 11-23)

さすれば神は戸口を過ぎり惨殺者がなく入り込みをかけてくるのを許さぬであらう。

Ĉio, kion li pensis kaj skribis, *preterpasadis* antaŭ li tute korpe kaj vivante. (FII122/5)

何でも心に思つたことや筆で書いたものは皆まるで形を具へ生きいきと眼前を過ぎてゆくのであつた。

Li ruĝiĝis kiel peonio, mallevis la okulojn, *preterpasis* kvazaŭ ne rekonante min. (M 170/19)

彼は牡丹のやうに眞赤に顔をそめ、目を伏せて、まるで私が見覺のない様なふりをして行き過ぎて行つた。

Tiel oni en la mondo *preterpasas* sin reciproke,—ĝis oni sin denove renkontas, kaj tio okazis al ili ambaŭ, ili ja renkontiĝis en la urbo. (FIII 111/-3)

こんな風に世の中は互に行きずりあつて（知らずに行き合つて）——とうとうまためぐり合ふものだが、この二人も同様、二人は町でバッタリと出あつたのです。

〔註〕 sin renkonti=renkontiĝi=renkonti unu alian. (お互に) 出遇ふ。

En rapideco ili *preterpasis* ŝin je kelke da paŝoj, sed poste ili haltis,

取り急いでゐたので彼等は數歩行き過ぎたが、やつと足をとめた。

„Sed tio estas superbe!“ diris la reĝidino, *preterpasante*. (FII 18/30)

『だがこれやシュペルブだわ』と王女はそばを通り乍ら云つた。〔註〕 superbe=フランス語で『すてきな、すばらしい』意。

Ĉu vi ne vidis la Morton, *preterpasantan* kun mia infano? (FIII 2/28)

私の子をつれて死の神が通つて行きはしませんでしたか。

Kaj Li diris: Mi *preterpasigos* antaŭ vi Mian tutan bonecon.

神は云はれた『吾が慈悲の程を汝の目前に通らせやう』(見せてやらう) (Er XXXIII-19)



# エスペラントの冠詞

前 田 勤

私が始めてエスペラントを獨習して化學報文を書きだした時、最もむづかしく感じたのは Zamenhof 自身にそれほど重要視していない定冠詞 *la* の用法であつた。岡本好次氏に當時その事を話したれば、謄寫版ずりの小坂狷二氏の冠詞用法の本を貸してくれた。それを一讀わしたものの、やつぱり疑問わ出る。最近 Esperanto-Lernanto に小坂氏の冠詞の話が出たが不幸、通讀する機會がなかつた。昔讀んだ小坂氏の記述の記憶をたどると——間違つているかもしれぬが——次の四種の用法があつたと思ふ。(1) 特定, (2) 全體, (3) 唯一, (4) 代表。しかし最後の“代表”は Zamenhof の用法 *Leono estas forta.* などから見て *la* を不要と思う。その他の三つも“唯一”“*unika*”なる一種に含まれやしないかと思つてゐる。この見地から素人の私がエスペラント實用から體得した私自身の冠詞の用法を次に述べようと思う。もちろん esperantologo でない私に Zamenhof の用例をひくわけにわいかない。用例は私が勝手に作つたものである。

まづ總てが“*unika*”の一種になる事を簡単に述べる。特定のものが *unika* である事わ云うまでもない。*Mi havas libron en la mano.* ここに特定せられた *mano* は——*mano* は二つあるから疑問が起ると云えばそれまでであるが——*mia mano* であるから *unika* なものである。次に全體を總てをひくくめてゐるから、これも *unika* になるはずである。*La studentoj de nia lernejo estas diligentaj.* と云えば *mia lernejo* の *ĉiuj studentoj* であるから *unika* である。*Studentoj de nia lernejo estas maldiligentaj.* ならば *kelkaj* 又 *iu* *studentoj* であるから *unika* とならぬ。次に *suno*, *luno*, *tero*, *aero* などわ——くわしく考えると色々な場合もあるが——まづ *unika* とみなさねばならぬ。くわしく考えると云つたのは“空氣と氣態

だ”は *aero* を物質名詞と見て *Aero estas gaso.* でもよく、*La aero de la ĉambro estas pura.* の如き場合の *aero* は特定せられたために *la* を要するようと思われる。しかし *suno*, *luno* などわ、まづ、純粹に *unika* と考えた方がよからう。しかし、ここに疑問の生ずるのは四季名と月名とである。四季名に對する冠詞の使用に關しては Zamenhof にも一定の考えがなかつた事わ、いくたの用例が證明している。*printempo* とゆうものわ一つにちがいないが、これわ一年毎にまわつて來るもので一見澤山あるように見える。*Somero estas varmega.* とあれば“夏とゆうものわ暑いものだ”とゆう事になり、あつて夏もあり、涼しい夏もある事にわ頓着しない。*La somero estis varmega.* とあれば“今年の夏”か“昨年の夏”かわ知らぬが“あの(この)夏わ暑かつた”とゆう事になり、ここの *somero* は *unika* のものとなる。故に私わ一般にわ *la* を用いぬ方がよからうと思う。月名に就ても同様の事が云える。*la februaro de tiu ĉi jaro* は一年に *februaro* は唯一であるから *la* を要する。しかし、*Februaro estas la dua monato de jaro.* とあればこの *februaro* は特定のものでわなく *reprezenta* である。故に一般にわ月名の前に *la* を入らぬと思う。

これから實例に就て *unika* 説を説明する。はじめに斷つておくが、これから示す用例は前からの關係が無く突然讀者の前に示されたものとする。そうしないと問題が複雑になる。

(1) *El (la) fenestro de mia ĉambro mi rigardis (la) straton.* “私わ部屋の窓から通りを眺めていた。”冠詞のない日本語は幸なるかな。何の疑問も起らぬ。しかし、エスペラントでわ、そういかぬ。*fenestro* に *la* がなければ、その *fenestro* はその部屋に於て *unika* のものでわない。即ち *kelkaj fenestroj* が部屋にあり、その *unu fenestro* から通りを



見る事になる。もし la fenestro ならば fenestro わ unika となり部屋にわたつた一つしかない事になる。次に straton に la がなければ讀者にわ、見ていたのは通りだつたとゆう觀念がただ浮べばいいので別にこの通り、あの通りの穿鑿を入らないのであるが、もし la があるとすると筆者と讀者との間に暗々裡に了解せられた“通り”，即ち、その家の前又わ周圍を通る通りとなり unika となる。

(2) Li klopodis por la enkonduko de Esperanto en la sciencan rondon. “彼わ科學界えエスペラントを導入するのに努力した。”ここに於てわ二つの la わ缺くべからざるものと思う。エスペラントの“導入”とゆう事にわ、あれこれとないはずであるから unika となり la が必要であるが日本人にわ、こんな場合に用いない人もある。la sciencan rondon わ科學界全體をさすから unika である。

(3) Miaj infanoj nun ludas en (la) ĝardeno. ここでわ、la があればもちろん ĝardeno, kiu apartenas al ni で unika である。もし la がなければ、隣人の庭か、どこの庭か、とにかく庭とゆうもので遊んでいるので strato でも parko でもない事になる。

(4) Drezen verkis historion de mondlingvo. ここで historio わ unu historia libro と解すべきで unika でないから la わ入らぬと思う。mondlingvo に la が入るか問題である。現に Drezen の“世界語の歴史”のエス語の表題にわ la が書いてある。つまり、ある一つの mondlingvo の意味でなく mondlingvo を全體さすつもりなので入れたのであろう。(或わ reprezenta の意か。これなら明かに la 不要。)しかし、homo が homaro となれば la を必要とするが如く、もし mondlingvoj と複数に書けば全體を表すため la が入るだろうが mondlingvo だけでは reprezenta と解すべきで私の意見として不要と思う。もし Drezen verkis libron de la mondlingva problemo. となれば mondlingva problemo わ unika となり la を要すると思う。少し話わはなれるが literaturo, fiziko, kemio 等に la が入るかどうかの問題である。現に literaturo などに la を附した例わ澤山ある。

全體を表しているから la が必要かとも思うが私自身が用いる時 la わつけないようだ。その理由わ、まだ考えていない。

(5) Jen kuŝas (la) ĉapelo de la patro. “そら、父さんの帽子がある。”la patro わ話し手の父か相手の父かこれだけでは解らぬが今話している人の間でわ unika とみてよいだろう。そこで ĉapelo であるが、この ĉapelo が la patro ときまつた人の物であるから la をつけると説く人があるかもしれぬが、これにわ私わ賛成しない。ĉapelo に la がなければ unu el la ĉapeloj de la patro の意と解し、la があれば la patro わたつた一つしか ĉapelo を持つていないと解すべきだと思う。

(6) La konstituo de aero plejparte estas oksigeno kaj azoto. aero に la が入るかどうかわ疑問であるが物質名詞とみて無くてもいいと思う。konstituo の la わ必要である。“組成”わ unika である、と云つても空氣の組成が一定不變とゆう意味でわなく、空氣の組成とゆう觀念があれこれ、あるわけわないのである。この la わ日本人が落す事が度々ある。(2) の la enkonduko de Esperanto の la を落すと同様に。

この外、問題になると考えるのわ表題の中の la の用法である。即ち、これから本文中に出てくる特定のものに la を附するか、どうかである。例えば“出家とその弟子”を譯す時に La bonzo kaj liaj disĉiploj. とすべきか、それとも bonzo の前に la わ入らぬかである。著者にわ、もちろん unika のものであるが讀者にわ、まだ知らぬものである。Selma Lagerlöf の著書のエス譯の表題にも La junulino el Stormyr. とゆうのがあるが、これにも同様な事が云える。unika であるからあつてもよいだろうとも思うが次のような場合にも出合う。日本の實例であるが Kabano sur la monto. とゆうのがある。讀者にわ未知であるが monto わもちろん unika である。そこで kabano わ? 山上にわ澤山 kabano があり、その一つだからこれから話す kabano でも la がないとゆうのかもしれない。しかし、この論法でゆけば前に書いた Stormyr にわ junulino が澤山いるわけであるから la わ入らぬ事になる。さても冠詞 la わ煩わしきかな。



# 日本詩歌のエス譯について

(8)

歌曲と歌詞との一致については akcento の一致といふ事の他に、も一つ重大な點がある：旋律の切れ目と歌詞の區切りとの一致がそれである。

前に述べた様に、作曲される事を豫期して作られた詩には（勿論最近の話であるが）歌詞の各節を通じて、區切りが一定の場合にあらはれる様になつてゐるが、すこし古いものになると、この點がまるで考へられてゐない。間に合せの例として手近にある『旅人の歌』（野口雨情、中山晋平）をみる。これは五聯より成立つてゐて、各聯が、七七七七の廿八音調になつてゐる。そして更に注意してみるとこの四つの七音句には  $7_1=3+4$ ,  $7_2=4+3$ ,  $7_3=3+4$ ,  $7_4=4+3$  といふ風に 3 音と 4 音が交互にあらはれてゐる。

山は | 高いし || 野はたゞ | 廣し  
一人 | とぼとぼ || 旅路の | 長さ  
ところが第二聯では

乾く | 暇なく || 涙は | おちて

戀しき | ものは || 故郷の | 空よ  
の如く  $7_3=4+3$  となつてゐるためにこゝだけがとても歌ひにくい。

文部省から發行された『尋常小學唱歌』には残念乍らこんな例がいくらかもある。誰も知つてゐる例として『一月一日』と『紀元節』を見よう。これらの歌の最初の部分は Fig. VII に示す通りであるが、これらは必ず A の様な字と配りによつて歌はれるべきであつて、B や C の様には決して歌はれない。兩曲共に所謂七五調であつて、こゝに示した最初の二小節の有する音節數は七音であるから B 又は C の様に音節を配置すれば、音節を長くのばす位置が一定して都合がいゝ筈である。しかるに A の様に歌はねばならぬといふのは何故であらうか。それは歌つてみればすぐわかる。即ち、この七五調の七音句は同じ七音で

も第一聯と第二聯とでは、その構成がちがふ。  
( $7_1=3+4$ ,  $7_2=4+3$ ) によつて各音符に對する音節のこの二つの歌などは、毎年儀式の際に歌はなくてはならぬので、學

松 葉 菊 延

校で何回となく練習させるから子供は大した苦痛なしに憶へ込むが、一つの歌詞が何十といふ聯から成立つ軍歌の如きにあつては、この區切れをハッキリ教へる事が出来ないし、又、軍隊などでは、音楽など判らぬ古兵が、口うつしを何十回となく繰返して新兵に傳へてゆくため、旋律が崩れと同時に區切れが變る例はいくらも聞かれる。例へば『橘中佐』のうちに『三軍の意氣天を衝く』といふ所があるが、筆者等は子供の時サングノイキーと歌つたものだが、此頃行軍しながら兵隊が歌ふのをきゐてゐると、サングノイキーとやつてゐる様だ。

譯詞に於てこの様な不體裁をなくするにはどうするかといふと、まづ歌詞の切れ目を旋律の切れ目に合ふ様にし、然る後音符と音節の配置を考へるのが宜い。例へば『一月一日』の場合ならば、Fig. VII に示した最初の二小節には、各小節の終りに（' 印の箇所）區切れを置き、原歌では二小節に對して七音節が配されてあるが、譯歌では、各小節に四つ宛即ち八音節を配する。つまり、八音節よりなる一つの句を二小節にあてはめ、一つの單語（前置詞は次の語の一部と見る）が一つの節から他の小節へ跨がらぬ様に心懸ける事である。（三宅史平譯『夕やけ小やけ』Esperanto-Lernanto, 1933, V は此意味に於て好き譯例である。）

一般に樂典はこの區切れについてハッキリ説明してゐない様だが、筆者の經驗(?) では、大抵各小節の終るところ、即ち一小節を *unu ciklo* とみれば、この *ciklo* の最後にある様である。よつて  $\frac{4}{4}$  正規拍子ならば 4 の次、 $\frac{3}{4}$  正規拍子ならば 3 の次、 $\frac{4}{4}$  變格拍子で最初が一個の四分音符なる時は、第三拍の次、 $\frac{6}{8}$  變格拍子で一個の八分音符で初まるものにあつては第七拍の次、同じく  $\frac{6}{8}$  變格拍子で



Fig. VII

Fig. VIII

Fig. IX

も、最初の一小節が、二個の八分音符若しくは一個の四分音符で初まる場合には區切れは第六拍の次にくる。但し日本語の音節にして五音句のあてはまる箇所、即ち、二小節が終りに休止符をもつてゐて五箇の基本音符（ $\frac{5}{4}$ に於ける四分音符、 $\frac{5}{8}$ に於ける八分音符等を假りにかく呼ぶことにする。）を有する場合は區切れが最後にくる。

Fig. VIII は『尋常小學唱歌』第四學年用の『雲』であるが  $\frac{4}{4}$  の正規拍子で各小節毎に語區の切れ目がきてゐる爲（二小節五音句の箇所は上述の通り）極めて歌ひやすい。

Fig. IX はやはり同書の『曾我兄弟』で  $\frac{2}{4}$  の變格拍子、八分音符一箇即ち 0.5 で初まつてゐるので旋律の切れ目即ち ciklo の終りは 1.5 のところにあつて、これ亦歌ひ易い。（印は ciklo の終り、即ち旋律の切れ目を示す。）

實際に歌詞のエスペラント譯をしてゐるとどうかして長い合成語などが出て来て各小節内でまとめるのが困難な事があるかも知れぬ。そんな時は合成語のつなぎ目を區切れに持つてくると耳障りにならない。

Fig. X 及び Fig. XI は旋律の切れ目と歌詞の區切れとの一致又は不一致が聴者にどん

な影響を與へるかを示すもので Fig. X a. は Auld Long Syne、即ち有名な『螢の光』の原歌の第一聯、a<sub>4</sub> はその第四聯、b は『螢の光』（小學唱歌集）、c は門馬直衛氏による原歌よりの日本語譯、d は同じく原歌よりのエスペラント譯（筆者の拙い譯）、e は Dr. Wilhelm Tholen によるドイツ語譯、f は Motteau によるエスペラント譯を比較對照したもの。 $\frac{4}{4}$  の變格拍子であるから區切れは'の箇所におこる筈であるが、これを正しくまもつてゐるのは第二小節に於て a<sub>4</sub>, b, c, d; 第三小節に於て a<sub>1</sub>, a<sub>4</sub>, b, c, d であつて c と f とは全然これを無視してゐるから非常に歌ひにくい。

Fig. XI は有名な Grieg の Solveigs Sang で a は Ibsen のノルエ語の原詩、b は三見孝平氏、c は門馬直衛氏による日本語譯、d は普通日本で専門家によつて歌はれてゐるドイツ語譯（譯者不詳）、そして e は筆者の試みた原語よりの拙いエスペラント譯である。

これも Auld Long Syne と同様  $\frac{4}{4}$  で弱起拍子であるから、區切れは Fig. X と同じ箇所にある。しかるに、この區切りを正しくまもつてゐるのは a, b, e のみで、c と d とは



Fig X

a, Should auld acquaintance be forgot, And  
 a, And here's a hand a trust y frien', And  
 b 古き交り、忘れず  
 c 古き交り、忘れず  
 d Cu po. uas ni for- ge. a. vin Ho.  
 e Ver - gäss wer al ter Freundschaft je Der  
 f Mal. no. vajn ge. fo. no. tojn. am

a, nev. er brought to mind?  
 a, gie's a hand o' thine  
 b 古き交り、忘れず  
 c 古き交り、忘れず  
 d ka. ra a. m. kar?  
 e er nicht däch. te mehr?  
 f cu for ge. su ni?

Fig XI

a Kan skje vil der ge bā-de vin- ter ag vår bā-de vir -ter ag vår  
 b 古き交り、忘れず  
 c 古き交り、忘れず  
 d Post intra for-pas' kuros for la prin-temp' ku-ros for la prin-temp',  
 e Der Win-ter mag schei-den, der Früh ling ver geh'n der Früh ling ver geh'n,

Fig XII

は 2 り の ば - ら は  
 [ ... ]

これを無視してゐるため、どうにも歌ひにくい。門馬直衛氏は歌詞の翻譯には細心の注意を拂つてゐられる様で、例へば、上の Auld Long Syne 直譯して『親しき友だち忘れ得べき』と題し、これを譯した動機を説明して：『螢の光』の歌曲として全日本に知られてゐるスコットランドの民俗歌曲。之に對して私が特に私の歌詞を附した理由は、此の旋律に「螢の光」の歌詞が如何に合はないかを、そして舊來の歌詞が譯歌詞でないから原詩の意味を傳へてゐない事を知るものに容易に明かになるに相違ない。「螢の光」の歌曲が歌はれる旋

律は元來の旋律から遙に遠く離れてゐる。』<sup>(20)</sup>と云はれ又『螢の光』と同程度にわれわれ日本人に親しまれてゐる『庭の千草』(原名 The last rose of summer) の歌詞を評して『私は此歌詞を名作と考へない。何故ならば之は若し翻譯が目標とされてゐるならば、明かに原歌詞と著しく相違し、原曲の特性的な美を損ずる様にさへ出来てゐるから……そして最後に詩が音樂の韻律に合はつてゐないからで

[316 頁へ續く]



# La notoj pri la disflora dato de ĉerizoj en Japanujo.

T. Taguĉi, *Mara Meteorologia Observatorio*, Kobe.

§ De niaj multaj meteorologoj, la esploradoj de disflora dato de ĉerizoj estas jam faritaj en multaj lokoj de la ĉeflando de nia Japanujo, kaj laŭ la rezultatoj derivitaj, ni povas montri la daton per ĝenerala formulo rektlinia:

$$X = a + bY,$$

kie  $Y$  estas disflordato,  $X$  estas la meza aertemperaturo de kelkaj tagoj kaj  $a$  kaj  $b$  estas la konstantoj pri la loko.

(La disflordato en fenologia observado estas tiu, en kiu oni unuafoje observis la stamenon malkovritan el la petaloj)

§ Ĝenerale la nombro de tagoj por kalkuli  $X$ -on estas malegala pri la loko pro la malegaleco de la klimato kaj la ĉerizo, sed aliflanke tio ne estas tiel malregula tute kiel ni ne povas trovi ian unuecon. La rezultatoj esploritaj pri tio en Tokio, Hikone, Sakai, Takata, Ucnomija, Kumamoto, Hakodate, Sapporo, Kofu, Tojooka, kaj Kakunodate montras ke la meza aertemperaturo de tridek tagoj inter la 40-a kaj la 10-a tago antaŭ la meza disflordato en la loko, donas la gravan influon al la disfloro de multaj specoj de ĉerizo.

Do nun, en tiu ĉi verketo, por  $X$  mi intencas uzi la aertemperaturon de tia tempo-daŭro kaj samtempe supozi ke  $a$  kaj  $b$  estas variantoj. La disflordaton ni prenas el la fenologia raporto kaj kalkulas  $a$ 'n kaj  $b$ 'n per la ĝenerala formulo. La rezultatojn de mia kalkulado, mi montras en ĉi-suba tabelo.

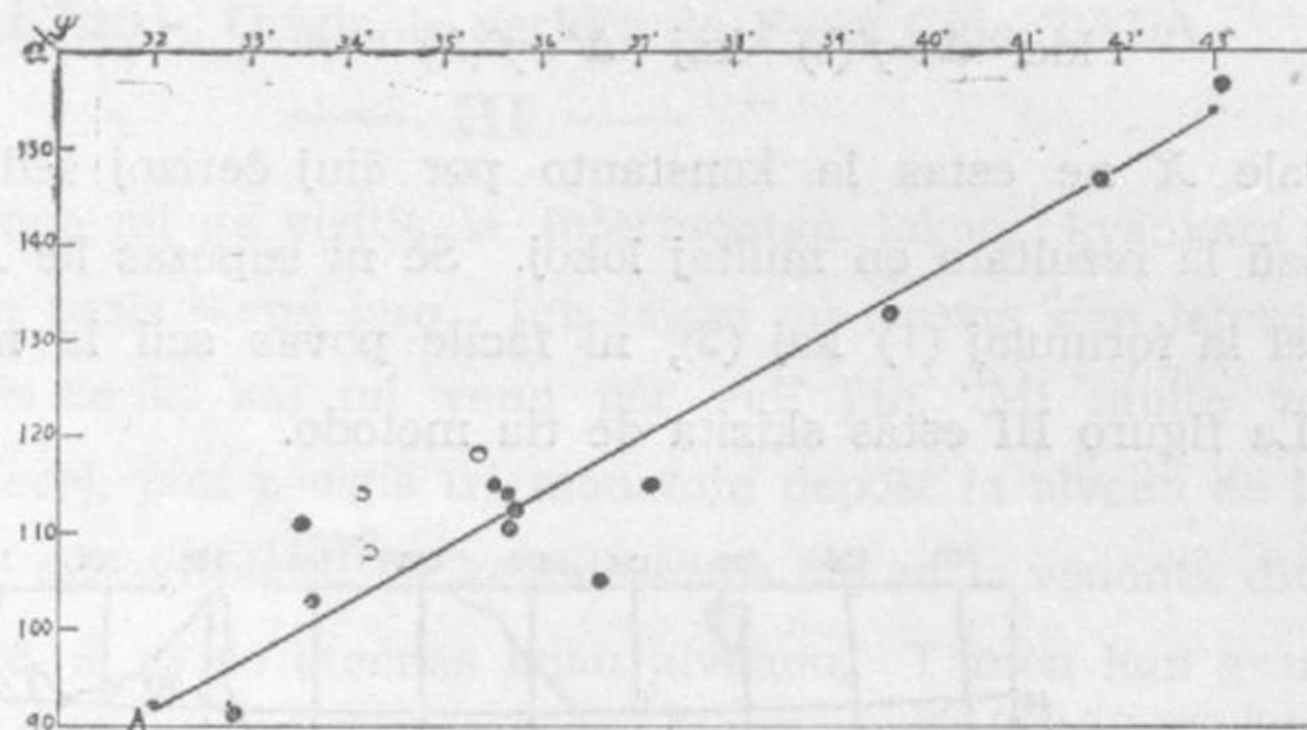
Lokoj	Latitudo (N)	Longitudo (E)	$a$ (+)	$b$ (-)
Hikone	35° 16'	136° 15'	117.4	2.2
Sakai	35 33	133 14	113.7	3.8
Takata	37 06	138 15	115.3	2.4
Ucnomija	36 34	139 53	105.5	1.8
Kumamoto	32 49	138 42	91.5	0.7
Hakodate	41 47	140 43	145.5	3.4
Sapporo	43 04	141 24	157.3	5.0
Tokio	35 41	139 46	112.0	3.2
Kofu	35 38	138 34	130.3	2.4
Tokuŝima	34 04	134 33	115.2	3.8
Fukuoka	33 35	130 25	103.1	2.2
Ŭakajama	34 14	135 10	108.0	2.6
Ŝionomisaki	33 27	135 46	110.5	2.2
Kakunodate	39 36	140 34	132.8	2.5
Tojooka	35 32	134 49	104.7	1.9

§ Estas imageble por ni ke  $a$  kaj  $b$  havas ian rilaton kun latitudo kaj longitudo.



En la nuna esploro, mi trovis ke  $a$  havas grandan rilaton kun latitudo  $\varphi$  kaj la rilatlinio estas montrita de sekvanta ekvacio. (vidu Figuron I)

Figuro. 1

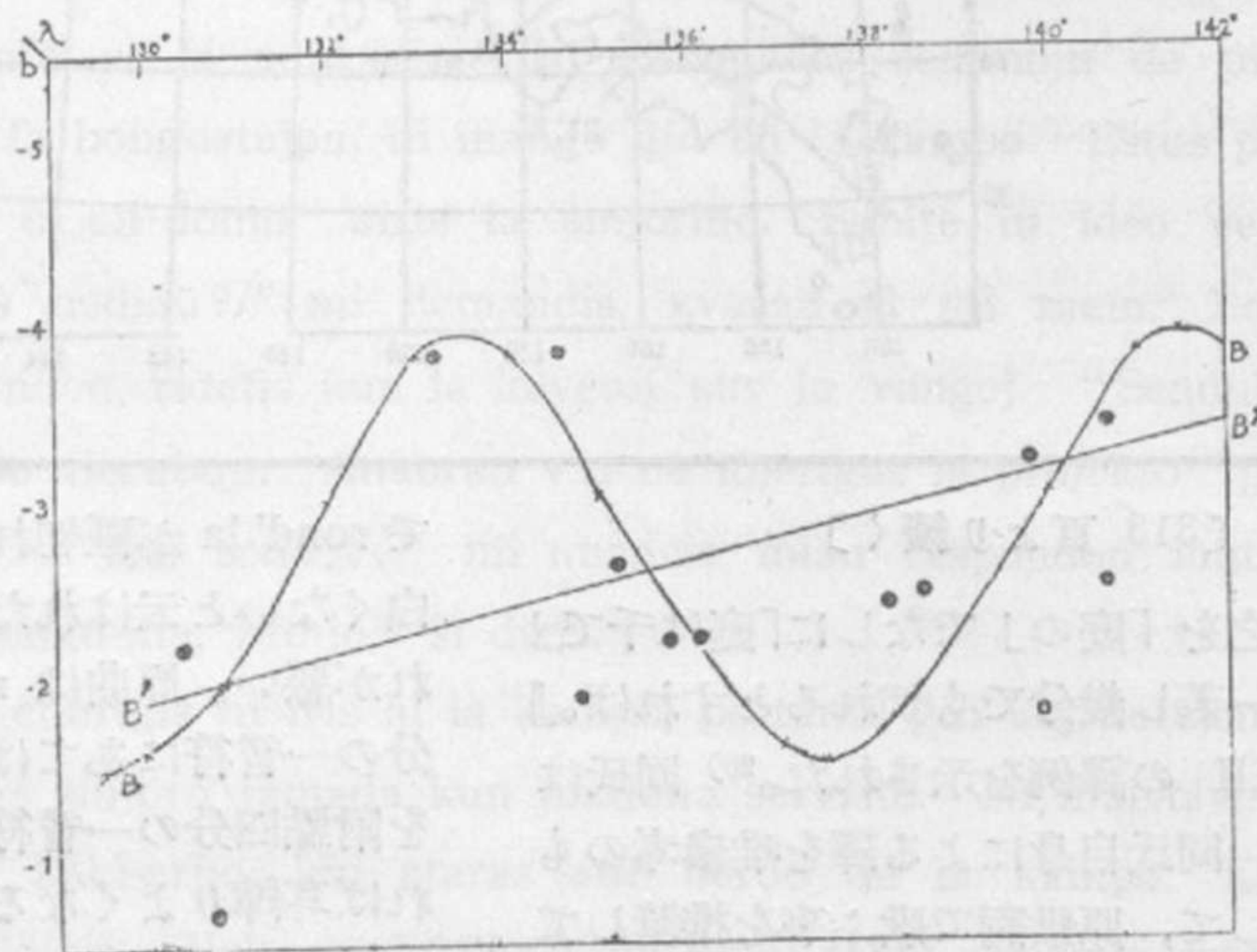


$$a = -84.63 + 5.55 \varphi \quad \dots\dots (1)$$

Sed ĝi havas neniun rimarkindan rilaton kun longitudo, nur la rilato estas uzebla iom por korekti la ekarton de la formulo (1).

§ La dua,  $b$  havas pli grandan rilaton kun longitudo  $\lambda$  ol kun latitudo, sed la rilatlinio ne estas sufiĉe klara nuntempe, ĉar la linion ni povas ĝenerale montri per du formuloj, kiuj estas preskaŭ samaj pri la ekarto. (vidu Figuron II)

Figuro. II



La unua estas B, sinusa kurbo, kaj la dua estas B', rektlinio, kaj eksperimenta formulo estas jene:

$$[\text{Por } B] \quad b = - \left[ 2.7 + 1.2 \sin 360^\circ \frac{(\lambda - 131.5)}{8} \right] \quad \dots\dots (2)$$

$$[\text{Por } B'] \quad b = 13.68 - 0.12 \lambda \quad \dots\dots\dots (2')$$

(La ekvacio (2) havas la mezan ekarton iom pli malgranda ol (2').)

Iom rimarkeble ke ia rilato sin trovas inter  $b$  kaj la alteco de tersurfaco  $h$ , kvankam mi ankoraŭ ne scias precize pri tio.

§ Konklude, mi volas rimarkigi, ke la ĝeneralan ekvacion

$$Y = a + bX$$



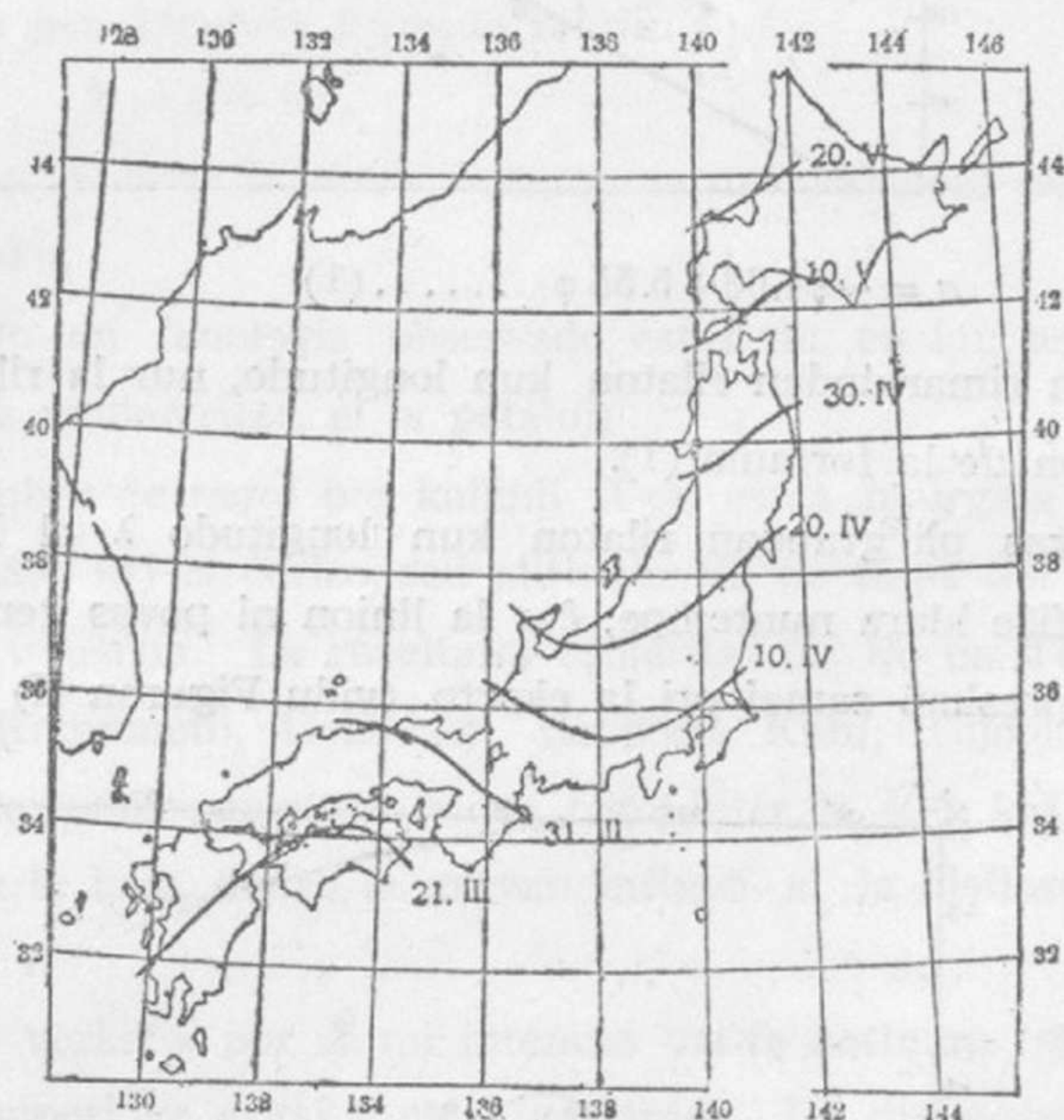
ni povas kredeble skribi per alia formo sekvanta:

$$Y = [f(\varphi) + \Delta] + [f(\lambda) + \Delta'] X$$

kie  $\Delta = f(\lambda)$  kaj  $\Delta' = f(h)$

§ Ĝenerale  $X$  ne estas la konstanto por ĉiuj ĉerizoj sed en meznombro, ĝi estas ĉirkaŭ  $6^\circ\text{C}$  laŭ la rezultato en multaj lokoj. Se ni supozas ke  $X$  estas  $6^\circ\text{C}$ , kaj kalkulas a'n kaj b'n el la formuloj (1) kaj (2), ni facile povas scii la mezan disflordaton  $Y$  en ĉiuj lokoj. La figuro III estas skizita de tia metodo.

Figuro III



[313 頁より續く]

ある。私は之を「庭の」でなしに「庭は千で」切りたい——若し幾分でも切れるとすれば。』とて Fig. XII の譯例を示された。<sup>20)</sup> 同氏は又しばしば、同氏自身による譯を唯參考のものであるとして、原歌詞で歌ふ事を推奨してみられる。その同氏が Solveigs Sang に對してはノルエ語の原歌詞ならぬドイツ語譯を掲げ、恐らく、それより譯されたと思はれる b の如き日本語譯（區切れはこのドイツ語譯と共通なる點をみよ）を示されたのは何としても諒解に苦しむ所である。

今まで、エスペラント譯としていろいろの人によつて示された多くの歌謠にも、この點で遺憾なものが相當ある様だ。歌曲の研究者である安井義雄氏は Tagiĝo の終りの方の *radias en rond' la ombroj*..... のところ

で *rond' la* が區切れなしの様に發音されて面白くないと云はれたが、まことにこれは區切れが悪い。原曲は *rond'* と *la* とを等しく四分の一音符にあてはめてあるが、*rond'* の方を附點四分の一音符の方を八分音符 *la* とすれば耳障りよくなる。

歌曲の譯者は一音符一音節(?)的の考へを改めて、區切れの點にも大いに注意すべきであらう。

#### 近刊

新撰和エス辭典  
エス醫學文集  
日本書紀(エス譯)  
日本歴史(エス譯)

學會出版部



# POR SERĈI LA TREZORON

(La Fino) Originale verkita de F-ino Cujá TADA

## — III —

Dopost tiam, iom longe mi ne vizitis la intermontan lokon, kvankam ni kelkfoje interŝanĝis leterojn. Jam pasis plena jaro. Iun tagon mi ricevis ŝian leteron, en kiu ŝi skribis, ke infano naskiĝis ĉe ŝi, kaj mi venu por vidi ĝin. Mi multe volis iri, sed malhelpite de diversaj aferoj, jam pasigis tri monatojn depost la alveno de la letero.

Enveninte en Majon, mi skribis al ŝi, ke mi vizitos ŝin en la venonta dimanĉo. Kaj mi ricevis respondon, ke ŝi avide atendas mian alvenon, Tamen kun granda malĝojo ŝi devas komuniki al mi la morton de sia infano.

En la dimanĉo mi ekveturis, imagante ŝian malĝojan vizaĝon.

Ondiĝo de montoj kaj ebenaĵoj ree estas kovritaj de nova verdkoloro. Kaj sur ili la suno verŝas siajn varmajn radiojn. En la aŭtomobilo la sinjorino tre detale rakontis pri sia mortinta infano. Kiam ni alvenis al la domo sinjoro Jamada jam ne estis hejme. Li iris al kampo.

Bela vetero! Azaleoj en la korto bele floradas. En akvon de lageto sub la fontano, sunradioj eniras, kaj fiŝetoj vidiĝas naĝantaj. Mi kaj la sinjorino sidas en verando de japana ĉambro, baniĝante en la sunradioj. Ni demetadas ŝelumojn de pizoj por la tagmanĝo. "Alportinte la bongustaĵon, ni manĝu ĝin en la kampo. Estus pli bongusta manĝi sub la blua ĉielo, ol en domo," diris la sinjorino. Subite iu ideo venis al mi. "En kia tago mi estas hodiaŭ?" mi demandis, kvazaŭ al mi mem. La sinjorino kompreninte mian demandon, ridetis kun la kavetoj sur la vangoj. "Sendube, hodiaŭ estas naŭdekoka tago de Secubun. Ankoraŭ v'n ne liberigas la projekto 'por serĉi la trezoron', ĉu ne vere?" "Jes, sed..." mi nuancis mian respondon iom hontante. "Poste ni iru tien, al Tengu-iŭa, Minjo," ŝi diris.

Kiam la bongustaĵo elfariĝis ni iris al la kampo, portante ĝin kaj botelon da teo.

Sur la kampo laboras sinjoro Jamada kun maljuna servisto. Ni malvolvis sternaĵon sur herboj, sub granda kaki-arbo, kiu staras sur bordo de la kampo. La du viroj venis. Ni kvar rondsidiĝis. Hela verdokoloro de junaj folioj de kaki estas tre bela. Mi neniam vidis pli belan ol ĉi tiujn. Ankaŭ striita ĉemizo de la sinjoro, ankaŭ blanka antaŭtuko de la sinjorino, ankaŭ niaj vizaĝoj kaj manoj tute vidiĝas helverdaj. Tie ni komencis malluksan festeneton.

Post la manĝado, ni tri iris al Tengu-iŭa. La roko tre alte suprenelstaras apud rivero. Mi diris, ke mi volas supreniri la rokon. Sed la sinjoro admonis min dirante, ke mi ne faru tion, ĉar sub la roko estis nemezurebla abismo, kaj se mi enrigardus ĝin, certe mi kapturniĝus kaj enfalus profunde en ĝin. Li bone konas la lokon, en kiu, laŭ la tradicio, troviĝas la trezoro, kaj li povas konduki min sen tia nebezona

(Rim. de la Red.: Pro la manko de spaco ni forlasis ĉ. 30 liniojn ĉe la fino de la II-a Patro)



aventuro. Sed malgraŭ lia bonkora admono, mia scivolemo forte incitis min. Mi arbitre insistis suprenrampi la rokon. Li embarasita kuntiris la brovojn, sed fine konsentis min. Feliĉe, li havas konvenan ŝnuron. Li ĝin alvolvis sur mia korpo. "Bone!" li diris. Mi eksuprenrampis. La du homoj akompanis min ĝis konvena terpunkto, ĉiam firme tenante ekstremcn de la ŝnuro. Mi apenaŭ singardeme ekstaris sur la pinto de la roko. Mi ne rigardas malsupren, ĉar mi teruriĝus. Mi direktas mian rigardon al maldekstra klifo. Mi fiksas la rigardon. "Ho!" mi kriis. Estas tie multaj birdoj. Kio okazis tie? Mia nervo iom malĝustiĝis. Gape mi staras momentojn. "Vi jam sufiĉe rigardis. Malsuprenvenu!!" kriis la sinjoro. Mi revenis al la realeco, kaj iris malsupren. Mi rulenfalis en la manojn de la du homoj.

Ni ekpaŝis. Sed mi ĉiam estas silenta. Multaj demandoj svarmas en mia kapo: Kio okazis? Kio estas? Kial?

Ni alvenis la terpunkton, proksime de la birdaj amasoj. Tamen, por konfesi la veron, mi ne malmulte seniluziis. Vere, nenia gravtaksebla loko! Sur la tero kreskas terure grandaj folioj de takeni-gusa kaj tennan-ŝo. En tiu loko ja certe povas esti paradizo de serpentoj. Mi ne kuraĝis esplori. Mi gape staras farante nenion.

"Nu, kio estas? ĉu vi ne volas serĉi la trezoron?" demandis la sinjoro. "Jes, sinjoro, kvankam tiom grandan ambicion mi ne havas, tamen, mi volas serĉi." "Tamen?? Jes, tamen...." li ripetis mian tonon kaj ridetis. "Do, vi esploru. Sed antaŭ tio, mi konsilos al vi, ke vi ne malesperiĝu, eĉ se vi trovus nenion. Prefere, mi volas diri al vi, ke vi povos trovi nenion, kiu kondukos al la eltrovo de la trezoro." "Per kio vi estas certa je tio?" mi iom ofendita demandis. Li trankvile ridetis. "Do, vi rezignu la esploron. Vi tute ensorĉiĝis en la novelon. Novelo estas novelo. Vi ne scias veran tradicion. De nun mi rakontos. Sidiĝu tien sur pura herbejo. Vi ne koleru kaj ne malesperiĝu. Prefere vi rigardu viajn ĉirkaŭaĵojn. Tie estas multaj aĵoj, pri kiuj mi devas instrui aŭ klarigi al vi. Nun estas benita tempo por ni. Ĉio kreskas kaj kantas en beno de granda naturo. Ĉu vi ne volas pli detale scii pri kreskaĵoj, pri insektoj kaj aliaj? Ni nun estas en muzeo de Dio. Ĉu vi komprenas?" De lia elokventeco mi ne sciis, kion mi diros. La sinjorino prenante mian brakon sidigis min sur trunko de granda arbo, forhakita. Mi preskaŭ estis ekploranta de io nescipova. Voĉoj de najtingaloj aŭdiĝas. Ĉi tie grandaj arboj estas forhakitaj kaj la herbejo estas hela.

"Mi petas, sinjoro, la detalon!" mi diris, bonvenigante per miaj okuloj la sinjoron, kiu venis post ni, tenante sian pajlan ĉapelon. "Pri kio?" dirante li sidiĝis antaŭ mi. "Por serĉi la trezoron!" Do, aŭskultu! Eĉ se ambiciuloj serĉos kiom ajn avide, facile ne aperos la trezoro. La trezoro, kiu estas kaŝita per grandaj manoj de Dio neniel estas trovebla per nura malprofunda simpla ambicio de ni homoj, etaj estaĵoj en la universo. Por serĉi la trezoron, ni bezonas grandan paciencon kaj sciencon." Mi teruriĝis de lia serioza mieno. "Do, la trezoro ne estas kaŝita de restanto de Familio Taira?" mi demandis. "Kompreneble!" li respondis, kaj daŭrigis: "Antaŭ pli ol miliardo da jaroj Dio kaŝis ĝin per liaj grandaj, ĉiopovaj manoj. La rakonto en la novelo estas skribita



nur por amuzi legontojn, prenante la interesan tradicion. Iu granda saĝulo el la restantoj de Taira estis scianta, ke en la loko ekzistas tre mistera aĵo. Sed li neniel povis scii, kio, kaj kiaforma estas la aĵo, kvankam li taksis ĝin eksterordinare valora. Li opiniis, ke lasi tian trezoron sub la tero estas granda damaĝo por homoj. Kaj li testamentis, por ke iu el la estontaj homoj facile povu scii la terpunkton kaj la ekziston de la trezoro. Lia scio estis tre vasta. Li estis bone scianta ankaŭ, ke en 98-a aŭ 99-a tago de Secubun nepre venos amaso da birdoj apud la terpunkto. Tial li elektis ĉi tiun naturan fakton kiel la rimarkilon. Mi ankoraŭ ne parolis al vi pri migraj birdoj. Migraj birdoj ekvojaĝas kaj alvenas ĉiufoje en sia decidita tago. Malofte ili ŝanĝas nur unu tagon. La amaso da birdo, kiun vi ĵus vidis, ĉiam alvenas en 98-a tago de Secubun, kaj post unutaga restado, ĝi ree ekvojaĝas norden. Ĉi tiun regulon la birdoj heredas de siaj prapatroj.”

En mia cerbo jam klariĝis la demandoj. Samtempe mi tute admiris Ĉiopovan Kreinton. “Nu, kio estas, kaj kiaforma estas la trezoro? ĉu ŝtoneto, kiel diamanto, aŭ metalo?” mi demandis.

“Pli multe valora ol diamanto. Eble estus metalo. Ankaŭ mi ne estas certa pri tio.” li respondis.

De tempo al tempo, mallaŭtaj najtingaloj aŭdiĝas. Brueto de Valofluo sonas el arbaro. Odoro de monta lilio ŝtele fluas en la aero. Ĉi tie, ankaŭ sur folioj de herboj, ankaŭ sur vestaĵoj de ni, leviĝadas “kageroo”. Zumadoj de abeloj min kondukas al sveniga dormemo.

“Minjo, ni iru por kolekti fragojn.” la sinjorino ameme dirante min helpis leviĝi. Kaj ni iris al arbeto por kolekti fragojn.

#### — IV —

En tiu tago mi devis reveni al Osaka en frua vespero. Sed mi ekhavis kapdoloron pro varmegaj sunradioj, kaj la sinjorino forte volis reteni min. Tial mi decidis resti ĝis sekvanta mateno.

Mi enlitiĝis tre frue. La sinjorino sidas apud mia lito, kaj rakontas al mi romanon, kiu koncernas al Tengu-iŭa... kompatinda tamen bela amromano de belaj geknaboj en tempo de Meiji-iŝin. Mi ekdormis.

Kelkajn horojn mi dormadis. Sed en mia sonĝo la loko kun densaj herboj, kaj serioza mieno de la sinjoro, kaj malgaja sed amoplena vizaĝo de la sinjorino aperis kaj malaperis unu post la alia.

Mi vekigis. Ĉu jam venis la mateno? Mi ĉirkaŭrigardas internon de la ĉambro. Bildo de vulkano, pendigita en Toko-no-ma aspektas terura. Griza ĉielo, nigra monto, kaj ruĝa vulkana fajro... estas la nokta vidaĵo. Iam mi aŭdis, ke Sinjorino Jamada tre ŝatas vulkanan bildon. Kaj ĉi tiu bildo estas desegnita de ŝi en ŝia lerneja tempo.

Parfumo de “bjakdan”, kiun vespere ŝi metis en incensujo ankoraŭ iomete restas.

(Daŭrigata sur p. 337)



## BIBLIOGRAFIO

(新刊紹介)

2 ekzemplerojn senditajn al ni recenzas.

Unuope ricevataj estas nur menciataj.

略號 { ◎ = 下取寄せ中のもの (賣價不明)  
 ■ = 將來取寄せる見込のもの  
 ▲ = 目下學會に在庫のもの  
 ★ = 取次がぬもの及非賣品

## 文 學

◎LA VIVO DE NIA SINJORO JESUO, de Charles Dickens, trad. de M. C. Butler, eld. Esperanto Publishing Co. Ltd., London, 1934; 17×23 cm. 118 p.; prez. 6 ŝilingoj.

エスペラント出版界における近來稀に見る豪華な外觀が、まづ眼をひく。豪華といつても絢爛といふわけではなく、装幀は、むしろすつきりした方で、草色のクロスにあつさりした書體の金文字入りで、製本は、非常にがつちりした感じを與へてゐる。中に用ゐた紙は飛切り上等で(鳥の子か)、四六倍判の大きさであるが、それに輪廓が施してあるから、本文の印刷面は、菊判くらゐの大きさ。それに十二ポイントくらゐの大きな活字で印刷してある。キリストに關する名畫の複製七面と著者の肖像、原稿の第一頁の寫眞等を添へてある。

本書は、ザメンホフ譯の Batalo de l' Vivo によつて、エスペランチストにとつて、特に親しみ多い Dickens の著であるが、出版を目的として書かれたものでなく、その子供たちのためにと、1849年に書かれたもので、その死(1870)後も原稿のまま、家族の手中に残つてゐたのであるが、その子息 Henry Dickens 卿が、遺言によつて、その死後における出版を認めたので、今年はじめて出版されたといふ由緒つきのもの。そして、あらゆる外國語譯に先んじて、このエスペラント譯が出されたのである。

Nia Sinjoro とは、もちろん、キリストのこと。福音書によるキリストの生涯を幼い人々によく解るやうに述べたもので、たとへば、「奇蹟」とか、「使徒」とか言つた言葉が最初に出て來たときには、特に注意を喚起してあつたりする。

上に書いたやうに出版を目的としたものでなく、自分の子供のために書いたものであるから、その文章中に溢れる慈愛が感じられる。

譯文は、原作の意のあるところを汲んで、

單語もできるだけやさしいものを用ゐ、文體も單純である。エスペラント文の程度としては、年少エスペランチストや、一般の初等講習會終了程度の人々の讀物に適するであらう。(Mijake-Ŝihej)

★PIRAMO KAJ TIZBEO, de W. G. Adams, eld. de Presejo Esperantista de Seattle, Seattle, Usono, 1934; 11×17.5 cm. 16 p.; prez. 10 cendoj.

Burleska Tragedio としてある。エスペランチストの會合での餘興として上演するに手頃であらう。(M-Ŝ.)

◎INFANO EN TORENTA, de Stellan Engholm, eld. de Literatura Mondo, Budapest, 1934; 13×19 cm. 114 p.; prez. bind 3.50 sv. fr., broŝ. 2.00 sv. fr.

Toronto といふ、われわれの持つてゐるやうな世界地圖では見當らない、北歐の小さい市の名は、しかし、エスペランチストにとつては、同じ著者の處女作“Al Toronto”以來おなじみの名である。

この新作は、その Toronto の、貧しい家庭に育つ子供たちの、その幼い日から始めて、これから人生の第一歩を踏み出さうとする頃までの生活のスケッチである。

彼等の生活の雰圍氣をなしてゐる親たちの性格、人生へめざめようとする彼等を脅かす社會の危機等も描かれてゐる。

あくどさのない、平坦な描寫に好意をもつことができる。文體も、内容によく調和してあつさりした、何の奇もてらはない、やさしい、氣持ちのよい文章である。エスペラント原作文學中ではまづ出色のものとして、推薦してよいと思ふ。(Mijake-Ŝihej)

◎GÖSTA BERLING, de Selma Lagerlöf, trad. de Stellan Engholm, eld. de Eldona Societo Esperanto, Stockholm, 1934; 14×19 cm. 552 p. prez. 6 kr.

Selma Lagerlöf の作品については、今年になつて、すでに二回紹介した(1月號; 4月號)。今度出版された Gösta Berling (エョスタ・ベルリングと讀む) は、Lagerlöf の處女作であり、同時に最大傑作の一つである。1890年、當時三十五歳の女學校の女教師であつた女史が、ストックホルムの婦人新聞の懸賞募集に應じて一等に當選した百枚ばかりの中篇ものに、後から書き加へて長篇となつたのがこれである。この作品の形式はサガ(北歐に行はれる傳説)の體によつたもので、それは、傳説であるとともに、同時に fabelo であり、小



説であり、一大叙事詩である。いつたいにラゲルレフの作品には、スウェーデン、殊に、そのウェムランド地方の地方色が、風景にも、人物にも滲み出てゐるのが特色であるといはれてゐるが、特に、その女性には異常な魅力——これはヨーロッパ人よりも、かへつて日本人に共鳴するものが多いと思はれるのであるが——を持つてゐるのが常である。この作品に出て来る女性にも、さうした鮮かな個性をもつて描き出されてゐるが、しかし、ラゲルレフが傾倒してゐたといはれる、スウェーデンの天才詩人アルムキストが、そのモデルであると云はれる、自由不羈の天才的英雄型の主人公、Gösta Berling は、實によく描き出されてゐる。その他超實在的性格者が、北歐の暗い天地に、驚くべき傳説的事件を、つぎからつぎに起こしてゆく、恐ろしい魅力を持った作である。

譯文は、例によつて、立派なものである。この譯文を読んで、エスペラントが、非常に特色をもつた文體を再現するにも適することがわかる。

多數に挾まれた、スウェーデン一流畫家の Einar Nerman の挿繪も、大菩薩峠における石井鶴三と言つたやうな、この作品とよいコンビをなしてゐる。(Mijake-Sihej)

▲ IMENLAGO, Theodor Storm, trad. de A. Bader, 蔡方選註, eld. de Ĉina Mondlingva Librejo, Peipino, 1934: 13×19 cm. 78 prez. 45 錢, 送料 2 錢。

ドイツのロマンチズムの末期を飾るシェトルムの珠玉篇として名高い「イムメン湖」。ドイツのある作家は、これを「薔薇の葉のやうな」と評したが、まことによくあたつてゐる。悲戀を描いて、實に淡々たる物語である。エス譯は、古く、パリのアシェット社から出し非常に多く讀まれたものである。譯文は、往往、おもしろくない表現法もあるが、概して平明である。最近、かなり活潑な動きを見せてゐる中國から、翻刻が出されたことを多とする。華文の脚註付きである。

◎ ROMANO PRI AFRIKA BIENO, de Olive Schreiner, trad. de L. A. Andrew, eld. Esperanto Publishing Co., Ltd: London, 1934; 12.5×18 cm. 270 p. prez. bind. 6 ŝ, broŝ. 4 ŝ. 6 p.

南アフリカ聯邦の奥地の荒涼たる農園——そこに生活するヨーロッパの移民たちの單調な生活。その中に、一人の外來者が飛びこんで来れば、どんな事件がおこるであらうか。

この小説は、二部から成立つてゐるが、そのおのおのに、一人づつの外來者が飛びこんで来て、波瀾をまきおこす。さうした波瀾は外の世界にあつては、日常の茶飯事にすぎないのであるが、文明から隔離された、この小天地にあつては、人の心を激しく揺りうごかしてゐる。それは、また、あまりに多い刺戟に麻痺してゐる文明世界の人々に、人間の心の問題について考へる何物かを與へる。

Olive Schreiner は、南アフリカ第一の女流作家で、この小説の中に主要な役の一つを持つてゐる少女は、作者自身であるとも云はれてゐる。彼女は、また熱烈な平和論者として大きな勢力を持つてゐる。

さうした作家の、この作には強く響くものがあつて、最近半世紀間におけるイギリス最大の政治家 Gladstone も、本書から強い印象を受け、長い間、いづれの書物にもまして印象づけられてゐたと言つてゐる。

エス文はやゝ晦澁であり、文法上の誤りや適切でないところもかなり多く、ことに代名詞の用法に穩當を缺いてゐるのがすくなくないやうである。(Mijake-Sihej)

◎NORDA LITERATURO, redaktita de T. landra, eld. K. Strazd., 1934; 14×20 cm. 84 p.

ラトビア語およびエストニア語から譯された五篇の短篇小説をおさめてある。それらの國語が、われわれに縁遠いので、作者について、われわれは聞いてゐないが、ここに盛られた作品は相當よいものである。

譯は完全といふわけにはゆかないが、だいたい、よい方である。紙も印刷もあまり上等でないが、讀みにくいといふほどでもない。これを第一輯として、つづいて二輯、三輯と出されるはずである。

Mi deziras sukceson de la entrepreno, por ke ni havu pli da okazoj rigardi la literaturon de l' malgrandnombraj gentoj en Norda Eŭropo, kiu restas al ni japanoj fremda.

(Mijake-Sihej)

## 美 術

■ARTHISTORIO, de Antono Hekler, trad. de K. Kalocay, eld. de Literatura Mondo, Budapest, 1934; 15×23 cm. 100 p.+112 p.; prez. bind. 15.00 sv. fr. broŝ. 13.00 sv. fr.

古代エジプトの藝術からはじめて、ルネサンスの前、ゴシック藝術に至るまでの、繪畫、彫刻、建築等についての歴史を、112 頁、146 個の寫眞版を入れて、述べてある。著者は、



ブダペスト大學の美術史の教授、ハンガリー語およびドイツ語の著述が多数ある。

第二巻は、ルネサンスから現代にいたるまで述べてあるとのことであるが、ヨーロッパの美術についての知識を、ひととほり得る上には、手頃のものであらう。巻末に建築上の術語が圖によつて説明してあるのは親切である。なほ、これは AELA の 1934 年度配本であるが、ひきつづき美術方面のものを出す豫定になつてゐて、1936 年度の AELA 配本中には、東洋美術史が収められるはずで、目下、わが國のエスペランティスト某氏の手によつて材料整理中である。(M-Š.)

### 民 族 學

▲LA KIRGIZOJ, de P. A. Smirnov, trad. de Avrin, eld. de Amerika Esperanto-Instituto, Madison, U.S.A., 1934; 11×17 cm. 20 p.; prez. 30 錢, 送料 2 錢。(賣切)

Etnografia Biblioteko の第 1 編として出されたもので、小い本ではあるが、エスペラントでは珍しい出版物である。東シベリアの南部キルギスのステップ地方の珍しい風俗、習慣の紹介。原著は 1914 年の出版であるから、革命以前の風俗である。巻末に術語集が添へてあるのは親切である。かうした出版物も續續出版されることが望ましい。(M-Š.)

◎POLA FOLKLORO KAJ POPOLKANTO, de S. Grenkamp, eld. de Esperantista Voĉo, Jaslo, Pollando, 133; 12×19 cm. 60 p. prez. 1.50 sv. fr.

ブリュアの「ザメンホフ傳」に、「東洋と西洋の眞中にリトワニアが横つてゐる」とあるが、ポーランドも、やはり、東洋と西洋との接觸點をなしてゐる（これは地理的の説明でないことを蛇足しておく）。比較的狭い地域に、東西の種々な思想、風俗、習慣、宗教等が、ここに落ちあつて特殊な文化を形成してゐる。その多面的な民族文化と、それが生んだ歌謡について述べたもので、1926 年 Edinburgh の夏期大學、講義したものである。

樂譜入りの民謡の翻譯數篇、アートペーパー別刷の風俗寫眞數葉等挿入されており、巻末には、進んで研究しようとする人々のための文獻も紹介してある。

かうした方面のエスペラント書きの著書は各國からもつと多く出てほしいものと思ふ。

(Mijake-Šihej)

### 紀 行・傳 記

■MIA VOJAĜO EN SOVETIO, de A. Slonimski,

trad. de S. Grenkamp-Kornfeld, eld. de Literatura Mondo, Budapest, 1934; 13×20 cm., 142 p.; prez. broŝ. 2.70 sv. fr., bind. 4.20 sv. fr.

AELA—'34 年配本第 1 冊。裸にされたソヴェートの姿を知りたいとは、世界のあらゆる國の人々の希望である。そして、これこそソヴェートの眞の姿だと言つて出された書物もすくなくない。しかし、それがソヴェートに對して *malfavora* であれば、ブルジョワ新聞のデマであると呼ばれ、*favora* であれば、ソヴェート宣傳のヨタ記事であると評される。しかし、ソヴェートが重工業の完成に莫大な犠牲を拂ひ、殆ど國民の生活をも破壊（一時的であるにしろ）してかへりみないかの觀のあること、赤軍の精銳化に全力を注いでゐるといふ二つの事實だけは、そのいづれからも讀みとることができる。ただ、これを批評するときに、重點を建設の面におくか、破壊の面におくかによつて、攻撃的ともなり、防衛的ともなる。

本書の著者はポーランド一流の文學作家、赤裸のソヴェートを見るために、この現代の不思議境にはいつたのであるが、入國第一日に驛に出迎へを出し、案内の婦人委員（最初は通譯といふ名目）をつけた對外文化協會の親切ぶりに、いささかお冠をまげた筆者は、鋭い皮肉で、集團家屋をつつき、キネマをつつき、裁判所をつつき、軍隊をつつき、そこから中をつつきまはつてゐる。そして、五ヶ年計劃について書かない勇敢さによつて、その最も大きな皮肉をとばしてゐる。著書は、ソヴェートについて、裁く勇氣を持たないと言つてゐるが、この著書も、「ブルジョワ派のデマ」の範疇に入れられるものであらう。

譯は、かなり難解な文章で、その點が缺點であるが、とにかく、近來稀れな興味深い讀みものである。(Mijake-Šihej)

■MARŜALO JOSEF PILSUDSKI, de Wacław Sieroszewski, trad. de Mgr. fil. B. Strelczyk, eld. Pola Esperanto Aocio, 15×21 cm. 54 p.; prez. 0.80 sv. fr.

ポーランドがソヴェートと不可侵條約を結び、さらに十年間休戦を約し、またつづいてドイツとも同じ條約を結んだことは、よく知られてゐる。が、これを結んだ立役者エゼフピウスズスキ元帥の名は、案外、日本では知られてゐない。しかも、この人は日本とも縁故がある人である。

最近半世紀間におけるポーランド獨立の全



歴史は彼の名を以て埋められてゐる。祖國獨立のため、その全生涯を捧げた彼は、東に、西に奔走し、日露戦争の時には、東京に来て數週間滞在し、わが參謀本部と接衝したりした。當時、「イギリスと日本の僱人」とまでけなされたりしたが、幾多の失敗にも屈せず、つひに回天の事業を遂げることができた。

その波瀾に富む生涯を綴つた本書の著者は Kabe 名譯でおなじみの *Fundo de l' Mizerio* によつて、エスペランチストに知られてゐる人。1933年創立されたポーランド文學院の初代の院長となつた、名高い著述家であるが、これも、ただの文筆の人でなく、政治運動のために、シベリヤに流されたこともある人で、元師とは親しい友人である。アイヌ研究のため日本へ來たこともあつて、數多くの著書中には、「朝鮮」、「支那物語」、「極東行」、「日本の噴火山上」、「サムライの戀」等の著もある。

譯文は流暢にできてゐるし、紙もよく、印刷も鮮明であるが、誤植がずいぶん多いのはおしむべきである。(Mijake-Ŝihej)

### 哲 學 ・ 社 會

◎SKIZO PRI FILOZOFIO DE LA HOMA DIGNO, de Paul Gille, trad. E. Lanti, eld. el Sennacieca Asocio Tutmonda, Paris, 1934; 13×18.5 cm. 145 p. prez.

著者は、Belgia Instituto por Altaj Studoj の教授。原文は、フランス語で書かれ、すでに七ヶ國語に譯されてゐる。

マルクス主義の歴史觀が、その立場を唯物論におき、社會の變革を經濟機構の改變によつてのみ求めようとするのを排斥し、「イデオロギーを、物質生活の結果たらしめようとするのは、非常なパラドクスの言辭である。それは辯證法と單純な智力とを歪めるものである。」と云ひ、マルクスの理論を「反理想主義的詭辯」と呼んでゐる。

そして、著者自身は、社會向上の原理を「人間的品位」の上においてゐる。「人間的品位」とは、萬人が驕慢な心を持つことなく、自尊的な魂を持つことであり、それによつて、萬人が、社會の向上に協力し、自由(この自由は夢想的な絶對的のものでなく、相對的のものであることを強調してゐる)の支配する、新しい眞の人間生活を來すべきであると云ふ樂觀的な、哲學的社會改良案である。

文章は相當に晦澁なところが多い。しかしこれが譯文のせいでないことを、譯者は、特にその序言中に斷つてゐる。(Mijake-Ŝihej)

■ABSOLUTISMO, de E. Lanti, eld. de Sennacieca Asocio Tutmonda, Paris k Federacio de Laboristaj Esperantistoj, Amsterdam, 1934; 16×24 cm. 16 p.; prez. 1.00 fr. fr.

これは、今年 Antwerpen で開かれた、オランダ語地方 FLE 大會の席上で、特に招待された Lanti の述べた演説速記録で、同大會の希望により出版されたもの。Lanti は、獨裁政治家であるといふ點において、Stalin を、Hitler, Mussolini と同じ kategorio に入れて、論難してゐる。これに對して、一聴講者から、ソヴェト防衛の立場からの抗議があり、それに對して、Lanti は、今日のロシアにあるのは社會主義でなく、最も悪性の國家資本主義であると反駁し、自分の演説は、ソヴェトを攻撃するためでなく、ソヴェト労働者を官僚の壓制下から救ひ出したいためであると答へてゐる。(Mijake-Ŝihej)

### 學 習

★3 IGI-IGI-BILDKARTOJ, desegnita de Wilhelm Drachholz, eld. de C. Walter, Berlin, 1934; prez. 0.15 Rmk.

初等學習者のために、接尾語 -ig- と -iĝ- との使用法を繪で説明した、三枚一組の繪葉端書。國際返信切手一枚封入、C. Walter, Berlin W 35, Graf-Spee-Str. 24 あてに申込みば一組送つてくれるとのこと。

### 運 動 ・ その他

■NOTLIBRO DE PRAKTIKA ESPERANTISTO, de K. R. C. Stürmer, eld. Literatura Mondo, Budapest, 1934; 13×19 cm. 125 p. prez. broŝ. 1.00 sv. fr. bind. 2.00 sv. fr.

Por Recenzo, Facila Legolibro, Esperanto Literature, 等の著者の隨筆集。Esperanto kiel vivanta lingvo 以下 Milito kaj Amo に至る數百項目、Homaranismo を論じ、Internacia Frateco を論ずるかと思へば、Esperanto kaj obscenaj vortoj を述べ、またエスペラントを放れて Ŝanĝo de moroj, La Religio を論じ、Obscenhumoro, La sinnudigo de la arti to を語つてゐる。多岐多端、おもしろいものもあり、くだらないものもあり、一般的な批評はできない。暇を持てあましてゐるとき、拾ひ読みするに適する本である。(Mijake-Ŝihej)

★DUDEKKVINA UNIVERSALA KONGRESO DE ESPERANTO, Oficiala Dokumentaro Esperantista, eld. de ICK, Genève, 1933; 15×22.5 cm. 108 p.



昨年夏、ケルン市で開かれた萬國エスペラント大會の議事録。ケルン大會は、いはゆる Interkonsento de Kolonjo によつて、reorganizo 問題に結末をつけた歴史的な大會で、この議事録は、さうした意味において、エスペラント運動史上に、特に重要な文献となるものである。(M-Ŝ.)

★SKIZOJ EL ESPERANTUJO, de Franz Ullrich, eld. de la aŭtoro, Bürgstein, Ĉeĥoslovakujo, 1934; 12×15 cm. 32 p. prez. 4.50 kĉ.

Pioniro, Samideano, Patrino 等、等の題で、エスペラント界の片隅でおこつた(事實か假構かは別問題)できごとのスケッチ集。これによつて、著者が、Esperantismo とは何であるかを説いてゐるのかと思つたら、Antaŭparolo によると、それらのことも相對的な現象にすぎないと斷つてゐる。(M-Ŝ.)

### 案 内 記

★PRINCLANDO LIECHTENSTEIN, eld. de Liechtensteinischer Verkehrsverein, Vaduz, Liĥtenŝtejno, 1934.

エスペラント入り官製エハガキで、われわれに親しみのある、ライン峡谷の美しい公國リヒテンシュタインの美しい寫眞多數入りの案内記。イギリス語、フランス語、イタリー語、エスペラントが併記してある。上記發行元(リヒテンシュタイン觀光協會)あて申込みば送つてくれるはず。

★DANLANDO, eld. de Turistforeningen for Danmark, Kopenhago, 1934.

ハムレットの國、アンデルゼンの國、デンマークの案内記。寫眞數十個、自國を中心とした、ヨーロッパ交通圖入り。申込み先は、Turistforeningen for Danmark, Vestre Boulevard 18, Kopenhago.

★HAGO kaj SCHVENINGEN, eld. Haga Unuiĝo por la Fremduĉtrafiko, 1934.

これは、一般都市案内記が、外客誘致を目標としたものであるのと、すこし、趣きを異にして、この「世界平和」の都市を訪れた人に役立たせるための案内記。だから、寫眞は挿入されてゐないが、ハーグの名所案内地圖と、ハーグとその郊外の海水浴場シベニンゲン間の交通圖を入れた、ハーグ見物案内書である。申込みは Lange Voorhout 102, Hagó の上記 unuiĝo あて。

### 雜

★LA INFLUO DE VEGETARISMO AL LA MORALA KAJ SOCIA PROGRESO, de Karl

Nebenzahl, eld. de Eldonejo „Vegetaranano“, Bukaresto, 1934; 0.15×14 cm. 34 p; prez. 2 fr. fr.

Biblioteko „Vegetaranano“ 第一編として出されたもの。人類は、技術的、科學的には毎日進歩してゐるが、肉體的に、また精神的には、退化しつつある。これは今日の文明なるものが、誤謬に基づくものであるからである。吾人は、自然へ還り、自然の法則に従つて、歡びと美と力との生活をすべきである。——といふ、菜食主義宣傳のパンフレットで、數年前、國際トレ・ドユニオン・コンクールに三等で入賞したものである。(M-Ŝ)

### 自 然 科 學

★RAPORTO DE LA AEROLOGIA OBSERVATORIO, DE TATENO (N-ro 9), Jarlibro por 1931, eld. de la Aer. Observatorio, Tateno, Japanujo, 1934; 22×30 cm. vi+214 p.

★OBSERVADOJ METEOROLOGIAJ k AEROLOGIAJ faritaj en la Aerologia Observatorio de Tateno en la internaciaj tagoj dum la polusa jaro 1932-33, N-ro 4 (Julio-Decembro, 1933), eld. de la Aer. Observatorio, Tateno apud Tutiura, Jap., 19.5×26 cm.; iv+60 p.

Ambaŭ estas la plej novaj raportoj el kutime de antaŭ kelkaj jaroj eldonataj de la Observatorio, kies estro estas eminenta kaj fervora esp-isto D-ro Oishi.

Japanaj esp-istoj ĉiam fieras al eŭropajamikoj per ĉi tiuj gravaj esp. verkoj.

★ALKALIECO EN LA SISTEMO PORTLANDCEMENTO KAJ AKVO de T. Maeda k. R. Syōzi, represita el Papers of the Institute of Physical & Chemical Research, eldonita de The Institute of Physical & Chemical Research, Komagome Hongo, Tokyo, 19.5×26 cm., 8 p.

La raporto de la kemia esplorado farita de niaj nelacigeblaj samideanoj T. Maeda kaj R. Syōzi. Japanaj esp-istoj multe dankas ilin pro tio ke ili povas manifestacii Esp. al neesp-istoj per iliaj raportoj.

★La Reakcio inter Portlandcemento kaj Akvo en Praktikaj miksporcioj, de Tutomu Maeda (folio)

★Volumenanalizo de Alkalio en Portlandcemento, de T. Maeda k. Ryūzō Syōzi (folio).

Ambaŭ folioj estas represitaj el Abstracts from Rikwagaku-kenkyūjo Ihō. (Instituto de Fiziko kaj Kemio).



## 内地報道

9月21日——10月24日迄に到着の分。報道は日本文で迅速に。地方會誌記事を以て報道に代ふるをえず

## 第三回北海道エス大會

明後年日本エス大會札幌に招待の件決議す

小樽市千代田ビル集合場に於て9月23、24日の兩日に亘り開催された。集るもの小樽札幌、岩見澤、旭川、函館、江別、江別乙、帶廣、苫小牧、靜内その他から47名。それに東京鐵道エス會の田中覺大郎氏の参加をえた。君ヶ代エスペロ、準備委員長の挨拶。大會々長の挨拶。各地代表の挨拶、祝電祝辭の披露を以て開會式を終え晝食、記念撮影の後大會協議會にうつり昭和十一年に第二十四回日本エス大會を札幌に招待するの件。北海道の中等學校にエスペラントを隨意科として採用方道廳學務當局へ請願の件を可決、引續き北海道エス聯盟總會にては「聯盟本部を山部より札幌に移轉の件」「機關誌發行の方法改良の件」「幹事改選」等可決。雄辯大會にうつる

Pri Ekonomia Krizo 原田三馬氏  
Esp.-Movado en Hokkaido 相澤治雄氏  
KURAGIGU! 木村喜壬治氏

Malpermesu publikigi originalajn verkojn en alilanda lingvo. 渥美樟雄氏

Plezuro benata trans Suferrado 岡垣千一郎氏

外に江口晋吉(小樽)、渡部隆志(苫小牧)、長谷川氏(帶廣)の諸氏(上記三氏演題不詳)が熱辯をふるはれた。

同夜は晚餐會に續いて大本、佛教、鐵道の三分科會を開催した。

第二日 24日は小樽バス觀光車にて郊外オタモイ海岸にピクニックに歡をきわめて午後二時閉會した。

次回大會は帶廣市と決定。

では主任たる小笠原馨至夫氏がエス語に好意を有せらるゝため今回同支部から“La Suno”と云ふエス文ばかりの會報が発行された(10月27日に創刊號發行)。

Jaro I N-ro 1の内容は Karaj Samideanoj (J. Ogasawara); Simioj Parolas; Fundamento de Mondopaco; Esperanto kaj Malarmado; Elspezo por Armiloj kaj Homa Vivado; Por la Paco en Eŭropo; Municiiistoj kaj Ŝtatistoj等。同誌は四六倍版八頁。エス譯は大阪エス會の松田勝彦氏が主としてあたられた由。

## 鐵道に於ける宣傳講演會

既報の通り東京鐵道エスペラント會主催のもとに9月29日午後1時より宣傳大講演會を丸の内鐵道クラブに開いた。講師、演題及順序は次の通りであつた。

## 開會の辭

東京鐵道エス會代表 小松文夫氏  
エスペラントの意義 岡本好次氏  
Mi dankas vin

東鐵教習所長 武居哲太郎氏  
私のエスペラント

鐵道省監督局長 前田 穰氏  
日本國民とエスペラント 永田秀次郎氏  
エスペラントむだばなし 土岐善磨氏  
世界旅行とエスペラント 川原次吉郎氏  
國民文化と國際語 藤澤親雄氏

閉會の辭 會員 伊藤武雄氏

どの講演も聴衆に多大の感銘を與へたが、特に永田氏が來年日本に開くことを目下交渉中の萬國教育會議に際しては、帝國教育會長としてエスペラントを用ひよと提議したいと述べたことは、全聴衆の非常に心強く感じた處である。尙鐵道界の要人前田、武居兩氏もエスペラントの宣傳普及に出来る丈の援助をなす事を約された事は國鐵部内の運動にとつては勿論、一般にとつても大きな力となる事を信ずる。尙この兩氏は共に日本鐵道エス聯盟の顧問である。

永田氏の講演は、折りよく來聴した横濱の

## 國際協會和歌山支部

## よりエス文雜誌刊行さる

國際協會(元國際聯盟協會)の和歌山支部(和歌山市西汀町一番地和歌山商工會議所内)

## 1935 年海外雜誌取扱

學會取次部

詳細規定目下作製中  
につき申込みを乞ふ



同志大野富子嬢が速記をとり講演雑誌「中央講演」に掲載される事になったが、本講演の部分の増刷が若干部出来る予定であるから希

望の向きは下記へ照會されたい。

東京市丸の内 鐵道省工務局保線課

小松文 氣附 東京鐵道エスペラント會

## 各・地・報・道

東京 ★學會水曜例會——Fabeloj III をよんでゐる。

### 學會水曜日例會

毎水曜日午後七時より本郷區元町日本エス學會階上にて。

出席歡迎！ 費無料

★「エスペラント」讀者の會——暑い間休んでゐた讀者會は久し振に 10 月 21 日晚元長崎醫大教授淺田一博士及び長崎醫大藥專部教授植田高三氏を招いて講演會を催した。まづ淺田博士が 1927 年にエス語を用ひて夫人同伴世界漫遊の旅に上られた時エス語にていろいろの便宜をえたことについて話されついで植田高三氏は同氏と淺田博士との關係及び同氏と學會岡本書記長との關係の昔話を中心に話され後は主として淺田博士を中心に座談にうつり同博士の専門である血液型の話や法醫學の話等で非常に興味ある一晚をすごすことができた。

### 東京學生エスペラント聯盟秋季總會

日時： 十一月十一日(日曜)午後七時より

場所： 日本エスペラント學會  
(本郷區元町一丁目十三番地)

會費： 二十錢

聯盟加盟校の學生諸兄は勿論其の他一般のエスペラントに興味を持たるる學生諸兄の多數參加せられんことを期待す。

當番校：東京帝大醫學部

エスペラント會

★電氣技術者エスペランチスト談話會——毎月第一および第二金曜日午後六時半から、銀座明治製菓二階で會合を持つことに決定。電氣技術者および廣く電氣に關して興味を持つ人々の來會を歡迎する。

横濱 ★Verda Jupitero——毎木曜 19 時より有隣堂にて。◇9 月 20 日自由會話會。◇27 日エス誌 10 月號合評會。盛岡の佐藤忠孝氏出

## 第 2 回 FER 大會

東京鐵道エス會では昨年(去年)の第 1 回大會の成功に續き一層周到な計畫によつて下の如く第 2 回大會を催します。御家族友人等誘合せ多數參會下さる様切望します。勿論 neesp-isto にも充分意を用ひて arangi 致します。

日時 11 月 3 日(明治節)午後 1 時

(午前は日本鐵道エス聯盟第四回總會を開催する)

場所 丸の内鐵道俱樂部(東京驛八重洲口を出て左へ鐵道省構内へ入る)

プログラモ大要

FER の現状 田中覺大郎

エスペラント演說

Pri veturiloj fluiniformaj 矢島英男

Esp. kaj virina vivo 栗山かず子

Esenco de simpatio 宇田川たか子

邦語演說

我等の立場と任務 伊藤武雄

共に働け！ 高橋菊藏

特別講演

日本主義と Esp-ismo 武藏倉治

餘興

Dramo 家庭綠化運動 FER-trupo

琵琶 Zamenhof 田中覺大郎

尙上記は順序及内容に多少變更があるかも知れません。又友會代表の方に挨拶をお願いします。

來聽大歡迎！

主催 東京鐵道エスペラント會

席さる。◇10 月 4 日「YMCA エス展について」(佐久間謙二氏)、「最近のエス界展望」(土師孝三郎氏)、FER の田中(覺)、高橋、鶴田の諸氏出席さる。◇10 月 11 日「私の學習經過」(飯田、爲家、村上、富盛の諸氏)。夫々の體驗をのべ後進の指針を與ふ。關西地方風水害の見舞狀發送の報告あり。席上義捐金を募集の所 圓餘集つたので新聞社へ寄託した。★ロンド訪問——市内各ロンドの親密なる協同を計るため協會委員は下記の如くロンド訪

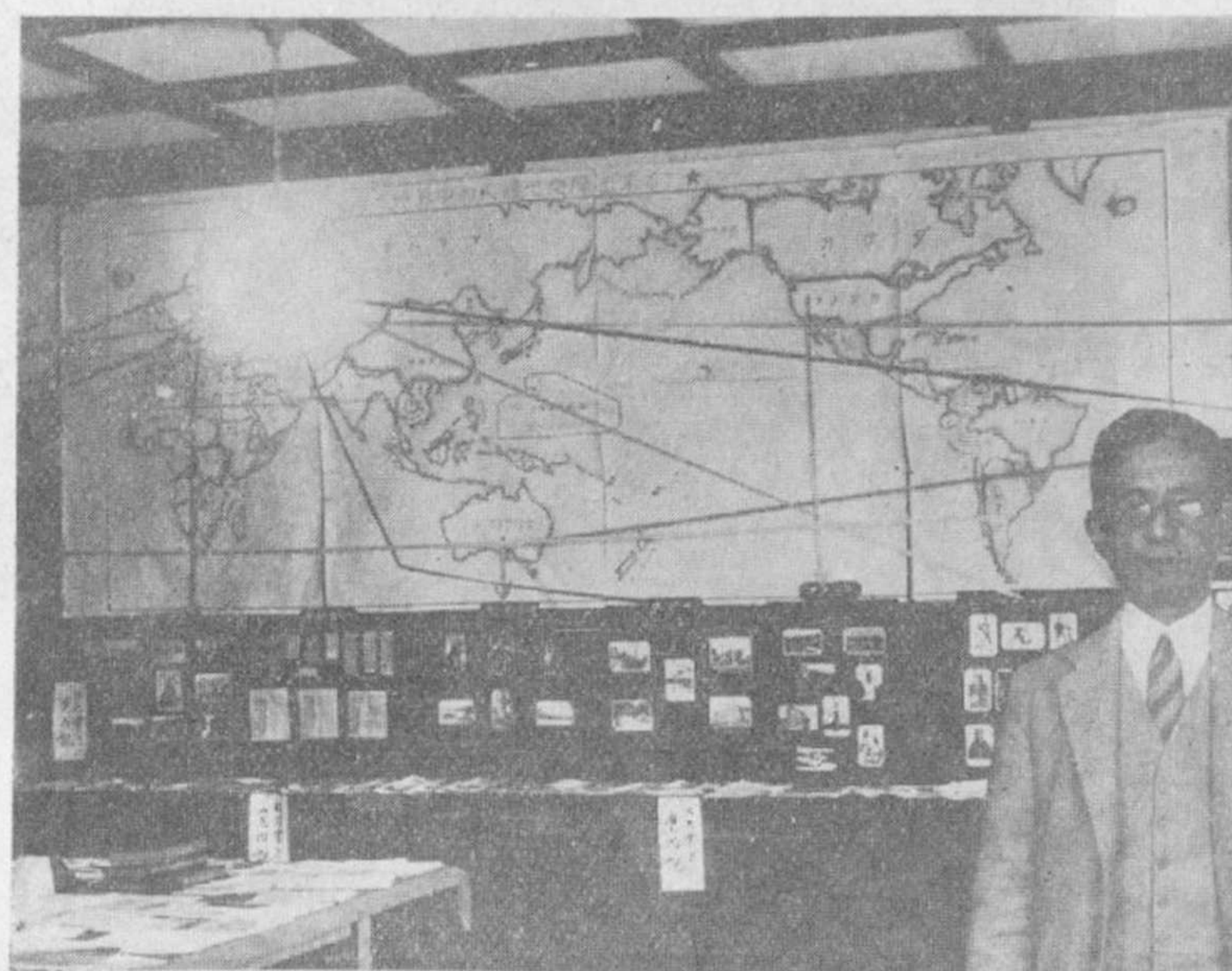




←横濱 YMCA  
エス會主催  
エス展覧會



↑東京鐵道エス會主催宣  
傳大講會講演者。右より  
前田、永田、武居、川原、  
土岐、岡本の諸氏。



→  
同上展覽會場の光景と  
藤澤氏。



←第三回北海道大會  
鐵道分科會。

左より〔前列〕關口、  
太丸、田中、村山、  
阿部。〔後列〕三崎、  
當摩、末澤、菅原、森  
脇、川原田、岡垣、  
小森の諸氏。



第一回エスぺラント講習會

←和歌山縣  
日高エス會  
第一回講習會  
(前列中央須川講師)



↑第三回北海道エ  
ス大会記念撮影



←名古屋エス聯盟  
主催小坂狷二氏  
歡迎會  
(立てるは小坂氏)



間を行ひ宣傳活動組織問題について夫々の意見を聴取した。神奈川ロンド(9月10日佐久間氏)。アミキーノ(10月11日鈴木爲家兩氏)。

★少年團に進出——YMCA エス展を契機として市内少年團に學習希望者が續出したので協會では富盛氏を講師として派遣初等講習をひらく事になった。10月17日より毎水曜19時半より二時間宛。用書短講。受講者10名。

★10月の委員会——10月13日伊勢佐木町有隣堂にて。10月のプロその他を決定。

★YMCA エス會——創立一週年を記念するエス展覽會をひらく。部員一同獻身的努力とYMCA 當局の援助とによつて9月17日—20日(2日間日延べ)。YMCA 階下少年部室にて開催。夜間だけの開場であり生憎雨降りでごまつたがそれでも210名の來觀者をえた。部員總出で熱心に説明したので大分効果があつた。(寫眞參照)參觀者の統計は次の如し。

	學生		一般		エス 協會員	外 人	計
	男	女	男	女			
17日	6	6	54	7	16	3	92
18日	5	1	22	4	3	1	36
19日	0	14	10	2	0	0	26
20日	9	2	42	1	2	0	56
+	20	23	128	14	21	4	210

18日19日は雨降。更に入場者70名に對し次の統計をとつた。

エス語を全然しらなかつた人				12名	17.14%
名前だけきいてゐた人				23名	31.42%
友人が學んでゐる				8名	11.42%
少しは知つてゐる				10名	14.28%
現在研究してゐる				10名	14.28%
地方エス會に入つてゐる				8名	11.42%

初等講習參加者18名。10月2日開講2ヶ月繼續。用書短期講習書。指導吉田、佐久間兩氏。

★ロンドアミキーノ——最近初中等の二つの會をもち研究、新人の養成に努力中、中等輪讀會——有隣堂にて隔週土曜15.30-17.30時、用書ロンドン塔。4-5名出席。初等講習——有隣堂毎金曜17-18時。9月21日開講——受講者4名指導——村上澤子氏。

★横商エス會——◇横商中等講習10月中毎週三回指導——隅田氏。

◇高専エス語研究會——毎水曜指導高村氏。  
◇外國語雄辯大會——10月14日。Carmo de Japanujo の題で三年生前田氏エス語で獅子吼。

★神奈川ロンド——毎月曜日19.5時より神奈川區平川町83保坂氏方にて Lingvo Stilc Formo 輪讀中。5-6名出席。附近の學會會員の出席を歓迎す。

宇都宮 ★宇都宮エス會——◇9月3日本縣教育課實業補習教育主事にして我等の同志たりし濱邊菊造氏は今度京都市助役として赴任された。◇9月11日若き同志として我等 klubanoj が大いに期待してゐた小島弘一氏は東京へ轉勤せられた。氏のため送別會を催し今後の友情と東京での活動をお願いした。◇9月23日大阪より多田、福原兩嬢の來訪あり數名の會員驛頭に迎へんとしたが列車遅延のため果さず森永キャンデーストアで今後の會の發展策につき討論中兩嬢も來られた。大阪方面の災害に對し慰問をのべ自動車にて大谷石産地を見物後一同と分れ黒崎(光一)、榊原の兩氏兩嬢を日光中禪寺に案内した。翌夕宇都宮驛歸着兩嬢と袂を別つた。旅行中は實用主義と理想主義との論をたゞかはし大いにうる所があつた。◇10月5日18時より縣廳前商工獎勵館内精養軒にて椎橋好氏送別會を開く、會するもの富永、藍澤、黒崎(弘)、山本、榊原の諸氏。氏は今度東京朝日の社命にて山梨縣南都留郡谷村町支局長に榮轉されることとなつた。約7年間の長き年月に亘り我が市に於てエス界の先達として我々を指導されたことに對し大いに感謝する次第である。我會としては椎橋氏始め三名の有能なる同志に去られ些か寂寥を覺える併しこゝに我々は一層發奮努力せねばならぬことを覺悟してゐる。

仙臺 ★學會仙臺支部——10月11日盛岡井川氏の來訪ありその節會合者の寄せ書をおくられた。

秋田縣 ★10月10日より10日間。講師村上秀夫氏。場所秋北新聞社樓上。

札幌 ★札幌エス會——全道大會には札幌エス會からの出席者は13名。内6名は鐵道關係。Oratora Kunsido には相澤、木村、渥美が熱辯をふるつた。これら的大會の講演その他は La Urso 誌第三號に發表するにつき御入用の方は郵券2錢封入申込まれたし。◇大會後の會合は順調にすすんでゐる。日曜は圓山公園にピクニーク。參加者7名。愉快な一日を過した。



## 帯廣

先般小樽にて開催の本年度第二回北海道エス大會にて明第四回北海道大會の開催地として帯廣市が決定しました。直ちに下記に事務所を置き準備に着手しました。同大會についての御問合せはすべて下記へ、

北海道帯廣市北海道銀行支店原田三馬氣付 第四回 北海道エス大會準備委員會  
委員長 原田三馬  
委員 長谷川守、沼田芳藏、堀田勝彦、佐藤松男、森本三郎

金澤 ★金澤エス會——◇中等講習 毎木曜。由比氏指導。毎回 10 名内外出席。童話讀本。◇10 月 3 日富山エス會山村氏北陸大會打合せの爲當會訪問。由比、坪田、荒木氏と語る。◇10 月 15 日例會兼田畑氏歡迎會——15 名出席。田畑氏の東京エス界の興味ある語をきく。

★一中エス會——10 月 15 日一中エス部員の手によつて一中記念祭エスペラント展があつた。參觀者 600 名。

名古屋 ★名古屋エス聯盟——◇名古屋鐵道局へ御榮轉の小坂狷二氏を迎へて 9 月 25 日名古屋新聞社會議室にて同氏歡迎會を催す。名古屋無電局長天野氏、J. Major 氏、聯盟會頭井上萬壽藏氏。名古屋新聞編輯長柴田義勝氏。帝國生命三輪氏等を始め 30 名出席。矢崎司會歡迎の辭、天野、井上、柴田、三輪、新井、白木、山田、マヨール諸氏の挨拶あり小坂氏より JEI 創立時代の苦心經營のお話を中心として和氣霽々裡に會は進行した。この機會に河村準備委員長より來年度大會の期日につき意見を求めた結果 9 月 21 日(土)、22 日(日)、23 日(月)、24 日(祭日)の間に開催することに最後の決定を見た。

★名古屋エス會 (NES)——◇9 月 20 日ブルターノ第 17 號發行。◇9 月 24 日 pikniko。9 時大會根驛に集合。高藏寺驛に向ひ玉野川の清流に到つて秋色を探り定光寺方面へ散策。10 名參加(内 4 名 f-inoj)。◇10 月 10 日二水會。中區鐵砲町白木氏方で開催。小坂、井上、マヨール氏も出席された。13 名。◇10 月 7 日中華民國の同志 Jun (熊)氏名古屋飛行學校に入學のため來名山田氏を訪問さる。山田氏は大須のヤマトダンス見物に同氏を案内の後、竹中氏その他二三の同志を訪問。名古屋大會まで御滞在の筈。

★名古屋醫大エス大會——◇名古屋新聞社で本會主催「エス」讀者の會を開催。作文練習そ

の他をなす。◇當會では「エス」讀者の親睦のため當市附近在住の讀者の adresaro を作成する筈につき本會宛 adreso 御通知を乞ふ。◇當醫大生理學教室松岡講師より書籍寄贈をうけた。

和歌山縣 ★日高エス會——(日高郡御坊町本町 3 丁目キクヤ藥局方)では 9 月 5-11 日第一回講習會を開催した。會場は御坊小學校。參會者は 18 名。講師は學會正會員須川庄九郎氏。猶 高エス會の代表者は榎本晴雄氏です。(寫眞參照)

大阪 ★大阪エス會——◇九月十八日平野町 4 丁目 Trapezo にて會話會“Kiujn Romajisistemojn alprenas japanaj esp-istoj”に付き討論。◇九月廿五日、大江ビル例會、フランス編輯讀、通釋練習、當地風水害被害會員に見舞狀を送る。◇十月二日フランス編輯讀、各地同志並に地方會員より本會宛見舞狀多數あり、感謝。◇十月七日、攝津耶馬溪へのピクニックは雨の爲十七日に延期。◇十月九日、R. O. 十月號合評、罹災會員伊藤氏より挨拶あり。出席の J. E. I. 維持員により、J. E. I. 大阪支部總會開催。代表改選の結果、桑原氏再選重任。◇O. E. S. 十一月會合豫告——十一月六日フランス編輯讀、同十三日 R. O. 合評、フ編輯讀、同二十日會話會(平野町 4 丁目喫茶店 Trapezo にて)、同二十七日フ編輯讀通譯練習、其他隨時興味的編成。◇例會場、北區絹笠町(堂ビル前)大江ビルにて。

★新星會——例會=毎週土曜日 19 時より「ツルゲネフ散文詩」の輪讀、會話會=毎月第 3 日曜 18 時より、大阪ガスパビル内喫茶部。◇豫告=秋季同志懇親會エスペラントの夕、11 月 3 日 18 時より、心齋橋明治製菓三階ホール、會費 5) (晚餐費)多數同志の參加を望む。

京都 ★三高エス會——九月休暇あけと共に文法研究會をおこす。しかも旬日ならずして例の大暴風に見舞れ cambro 半壊、器具書籍を多少破損し出鼻を挫かれたが一奮發のつもり。機關誌“Libero”も次回は四十號を迎へるに當り頁數をまして部の歴史その他參考資料をのせる豫定なれば從來の編輯に對する意見又は内容につき御批評を賜りたし。

尼ヶ崎 ★尼崎エス會——過日の風水害により會員二名床上浸水數尺に達したものがございますがその他は被害僅少。水害後も毎週木曜日 7.5-9.5 時迄例會、フランス篇輪讀中。會場尼ヶ崎商工實修學校。

松山 ★松山エス會——◇事務所變更——



松山市千舟町谷口石油商支谷氣付。◇初等講習——4月より7月までラヂオ・テキストを用ふ。5名。◇研究會——10月より毎週水曜。上記事務所にて松山市驛より徒歩5分間。同所は熱心なる同志佐伯雅堯氏御勤務の場所にして、日曜祭日をとはず市内外各同志と聯絡をとれる便宜あり。研究會は原則として會話中心なるも便宜學會「エスペラント」誌を持參することになつてゐる。◇一時轉任をつたえられた村上氏も引續き當市に勤務さるるも目下同氏は受験準備に没頭されてゐて毎週水曜日のみ參加さる。

福岡 ★學會福岡支部——初等講習會。9月20日より毎週月木2回開催、參加者7名、講師川關氏、用書短期講習書。◇第1回月例會。去る臨時總會に於て當支部更生策の一として今後毎月一回開催の事に決定した月例會は其の第1回を10月15日午後7時より風州屋菓舗に於て催す、當日は九大大島伊藤兩教授並に江崎教授夫妻はじめ同志18名參會更生の首途に相應しい盛會であつた。定刻堀内幹事開會の挨拶を兼ね月例會の誕生のいきさつを述べた後、第1回 parolanto として伊藤徳之助博士の *interesa kaj instruema* な歐米旅行談を拜聴する。次いで一同 *libera interparolado* に入り歡を盡して午後10時散會す。◇10月7日夕當地福日新聞社講堂に於て教育會主催永田秀次郎氏講演會開催さる、同氏は日本の國際的地位の題下に *Esp.* 問題を論じ右講演は其の後同紙上にも連載せられ一般に多大の感銘を與へた。尙同氏は福岡高校に於ても同様講演をせられた由。

宮崎 ★宮崎エス會——10月5日神武天皇東遷2600年祭參列のため黑板博士、永田秀次郎氏が來宮されたので兩氏のため謝恩歡迎會を開く筈で幹事は度々その宿舍をお訪ねしたが御多忙のため面會の機をえず。僅かに刺を通じて敬意を表したに止つたことは遺憾であつた。但し永田氏が10月3日全國教育者大會席上に於ける演說中に我エス語の正しき認識と學習の必要に言及されたことはこの上なきよるこばしき事である。◇初等講習は崎村講師を中心に *Ezopo* を研究し中等部は近くフランス篇を終り *Semanto* の合評に移り次いでロンドン塔を輪讀することに決定。

青島 前報で青島には中華側のエス會がない様だと報告しましたがその後『青島世界語學會』なるものが見つかりました。指導者韓青才氏は *UEA* の *delegito* で活動的な面々は季青氏呂吟聲氏等。6月17日東

京より同志岩田宗一郎氏、上海よりの霍非 (*Ho fio*) 氏の歡迎會を韓氏等が開き *japanaj esp-istoj* たる中學生七名が招待された。吉村氏も出席の筈だつたが急用のため果さなかつた。總出席者は約30名宣傳のため *nees-istoj* も居ました。約2時間の後散會。其後民國側の諸氏と相提携してゐる。同會の *adreso* は平原路、青島無線臺宿舍韓青才先生方です。(島田虔次)

## 鐵・道・と・エ・ス

聯盟本部 ◇10月の指導：11月3日東京に開催すべき第四回聯盟總會を前に總會の意義を闡明し、各地方會より萬難を排して出席者を出すべき事、又議事、協議にもより一層の熱意を示すべき事を強調してゐる。

東京 ◇研究會 毎木午後4時50分より6時迄輪讀講習の形で開催中。指導者小松文夫氏。「繪のない繪本」を10月18日讀了し當分は聯盟機關誌8月號エス文特輯號を用ひ鐵道關係記事を読む豫定。出席20。◇*Stela K.* 毎第一、三土曜午後1時より。9月1日 *temo: La mondo post 100 jaroj* 司會：高橋菊藏氏。相等な夢想意見も聞かれた。9月15日 *temo: Mia opinio pri amo.* 司會：菅原壽子嬢。 *feliĉa, ĉagreniĝa, dolĉa k. c.* すこぶる多彩なものであつた。中には貴重なる體驗を告白に迄及んだ者もある。出席者各15。◇初等講習會 別項宣傳講演會に引續いて10月3日より6週間開催。毎週月水金午後4時50分より6時。講師青木武造氏。用書學會發行短期講習書。受講者約25名。◇月例會 今月から機關誌の批評を主としてやる事に決定。10月13日午後1時より會機關誌 *FER* を取扱ふ。出席15。以上の會場は何れも丸の内鐵道クラブ。◇*Nova K.* 毎火新宿白十字に開く會話練習會は常に *gaja* である。時間は午後6時30分より8時30分迄。參會大歡迎。殊に初歩の者を歡迎する。

◇中央委員會 9月25日午後5時より新宿鐵道クラブに開く。常任委員改選直後で各部から向後1ヶ年の事業計畫の發表がある。別項第二回 *FER* 大會開催に決。出席中央委員10、常任委員6。◇新常任委員(各部々長)の顔觸れ。總務(委員長兼務)小松文夫、宣傳松本浩太郎、教育萬澤まき子、出版田中信之通信矢島英男、會計河野政好の諸氏。

京都 ◇研究會 二と七の日を標準として開いてゐるが出席者多からず。9月よりは會



場の都合がつかないので當分休會の事とする。◇輪讀會 毎土午後6時半より京都鐵道俱樂部に集合の上會場も決定する。大阪、福知山より應援出席を得て熱心な研究をなしてゐる。◇機關誌 KFER を擴大し、會員相互が業務上容易に連絡出来ないからその補助とする。

郡山 ◇例會 6日に1回午後7時より9時迄鐵道治療所にて開催中である。研究用書 Ezopo。出席毎回4, 5名。10月からは中等研究會として毎週土曜とする。◇初等講習會 9月20日より毎週月木曜午後7時より9時迄。講師澤栗重雄氏。用書學會短期講習書。これに先立ち宣傳座談會を開き多大の効果をあげた。

仙臺 10月1日聯盟本部委員田中氏公務旅行の途次本會を訪問し會の中堅萩谷、石田兩氏と運動に對する協議をなした。

札幌 ◇輪讀會 毎木曜午後4時10分より5時半迄 Karlo 輪讀。次いで作文練習をなす。これは出題を次回の會にて文を持寄り研究し合ふ。◇會話練習會 熱心な f-inoj の爲め毎日晝食後の休憩時間を利用して約30分間三崎氏指導のもとに會話練習をなして居る。尙過る小樽市に於ける北海道大會で小樽の同志の流暢な會話振りを見て一同會話練習に熱を加へつゝある。◇エスペラント誌を會の費用にて購入し俱樂部圖書室に備付け宣傳に供する事とした。

北海道大會鐵道分科會 大會役員の斡旋によつて初めて開催された。大した議事もなく先づ顔合せに過ぎなかつたが、折よく聯盟本部委員田中氏が公務旅行の途中出席されたので氏の協力を得て今後の計畫に就て漸次具體的な案を得る事が出来た。北海道方面の運動もこれをきっかけとしてずつと強固になるであらう。出席者は札幌6, 旭川4, 苫小牧1, 室蘭1, 他に本部委員1であつた。(寫眞參照)

## 地方會機關誌その他

〔お断り〕 前號本欄第6行 La Fervojisto 以下は別項にすべきを組ちがへたのです。

★星影 (廣島) 4號。(エス文通——丸岡、Observu Esp!——山田、其他)。

★La Lumo Orienta (佛教聯盟) 4年3號。(Kio estas Mahajana Budhismo?, 無量壽經優婆提舍願生偈エス譯——山本、Historio de Sin-Budhismo——太宰、佛教エス術語、法華經化城喻品エス譯——野原等)。

★La Aŭroro (九州聯盟及學會福岡支部) 4號。報道のみ。

★Hokkaido-Esperantisto (普及會北海支部) 9月號。(Takadaja Kahei——Riofu; Jamabe——渡部等)。

★Verda Haveno (横濱) 9月號——(横濱のエス會——土師; Suŭa 氏へ——佐伯、Sakuntala について——富盛等)。

★El Nara (宮武個人誌) 2號。和製外國語、Tjerita "Sangkoeriang" (II)。

★La Dezerto (東京、千住) 6號。(ソヴェートからの手紙、投書欄——岡部、La Alaŭdoj——緒股譯、La Monta Gastejo en Malfrua Aŭtuno——見良坂譯、Fabrik-ĉe'lo——長田譯、千住エス會の小史)。

★Ora Delfeno (名古屋) 17號。(Vivdaŭreco de Japano——金子、Nubo——谷村、Malsano de Pupo——岩田、Kestgardeneto——山中、Matena Manovro——衣川)。

★La Fervojisto (鐵道聯盟) 9月號。(海外通信の話——大谷、外國 Esp-isto に接して——仁岸、——モヴァデイストとして——高橋、舞子小景——小宅、其他報道)。

★Semanto (宮崎) 10月號。(Bibliografio Esp.——杉田、Semanto-Hospitalo; El mia taglibro 其他)。

★La Bulteno de KEA (神戸) 9號。(Komen-canta esp-isto parolas——Ŭada; Kono al Budho; Dediĉas al F-ino F. F.——奥村、Vagonaro ekiras 及 Lasi la plumon——福原等)。

★エスペラントの友 (友の會) 9號、10號。第10號から12頁に擴大。全エスペランティスト名簿一部宛掲載。

★La Verda Stelo (ミヤコ) 22號。(北九州エス運動思ひ出(續)、何故つゞかぬ——田中顯、Simetria Koordinata Metodo——鮎川譯)。

★MER (盛岡) 9號。秋田青森兩縣の同志を訪ねて——大川、其他)。

★FER (東京鐵道) 9號。紀念號發行に當つて地方會より、Rondeto 誕生一週年を迎へて——田中、高橋、松本、野上、萬澤、宇井、組織寸感——伊藤、La Revido 橋本、Akri-gebla Hakilo——杳木、その他報告)。

★Aganto (アガント社) 2號。(Disko de Karmen——須磨、Blanka Vizago de Virino——見良坂、Mi jam mortis——西川、Mortis la Sekreto kun Ŝi——桑原等)。

★KFER (京都鐵道) 5號。(學習の動機——渡部、Uragano——國技、其他)。



- ★Kor FER (郡山鐵道) 4 號。(報道その他)。  
 ★Bulteno (金澤) 10 月號。(會報等)。  
 ★Bulteno de KEA (神戸) 10 號。(La tifona malfeliĉo — 永井、Biersaŭmo — 柳、En mansardo — 原木、岡部君に開く — 永井、Mi ne komprenas — 峯谷等)。  
 ★FER (東京鐵道) 10 號。(吾等の月例會 — 高橋、機會を掴め — 橋本、私の經驗から — 鎌田、Belaj haroj k kara horloĝo — Imai、Ŝerco de Sturno — Iŭamura 其他)。  
 ★Marŝu! (創刊號)。(神戸市灘區天城通 8 の 142 マルシュ社發行)。(Saluto; Zamenhof; 二つのエス世界會議、ソヴェートから、Ĉu sennaciulo aŭ imperialistaganto? 等)。  
 ★Ni Korespondas (コレスポンド・グループ) 17 號。(エス書き案内書の蒐集 — 安恒、無題 — 山本、僕の文通 — 三家、雜誌 — 鬼頭その他)。  
 ★La Fervojisto (鐵道聯盟) 37 號。(太陽禮讃と觸媒作用 — 武藏、エス教授法 — 伊藤、Mia Dolĉa Hejmo — 大谷、Pri Tanabata — 根本、國際通信の手引、其他)。  
 ★Verkaro (猪股氏個人誌) 2 號。(Por la evoluo de Esp.; Kiel venis al mi mia amiko?, Travivo de iu Idioto; Alaŭdoj; El kantaro de Takuboku; Orig. Poemoj.)  
 ★Grandurso (苦小牧) 3 號。(北海道大會記念號)。(大會の思ひ出 — 渡邊、川原田、柳、土田、廣瀬、鈴木(武)、岡垣; 大會不參の辭 — 鈴木(春) 等)。

## 新聞雜誌とエス語

- ★名古屋新聞 (8 月 30 日) — 森羅萬象 — 小坂氏についてかいてゐる。  
 ★名古屋新聞 (9 月 26 日) — 小坂氏歡迎會記事。  
 ★越中新聞 (9 月 22, 23, 24 日) — 非常時日本とエスペラント (清水順吉氏)。  
 ★「光」(一燈園發行) — 光明祈願が邦文及エス文で二頁にのせられてゐる。エス文の譯者は岩橋氏。  
 ★「國語と國文學」(10 月號) — 沼澤龍雄「日本文學の外國語譯」中にエス譯を紹介。  
 ★「國語と國文學」(10 月號) Walter Donat「日本文學の比較考察」中に「過去に合理主義理論主義の時代があつた。……多くの文學界の最高の理想は世界文學のエス語へ移植であつた。今日……その國の言語によつて讀まなければならぬと云ふことが再び自明の眞理と

なつた。……」とあり。

★進歩——第一卷第八號(本年 11 月號)より“La Progreso”なるエス語の subtitolo をつけた。猶每號一頁づゝエス文欄をおくことになつた。

★國際排酒時報 (43 號)。La Triumfo de l' Alkoholo—Prof. Sygnarski-Bydgoszcz, Polujo (エス原文及和譯)。

★東京朝日 (10 月 7 日) — 鐵箒欄 — 記念切手。

## 書籍とエス語

- ★柳田國男氏著「民間傳承論」——「學問孤立の危險」の章中「……國際文化局なとも結び、エスペラント語などで研究發表すれば諸外國の學者をも喜ばせ得ると思ふ。……」とあり。  
 ★沼澤龍雄氏著「日本文學史表覽」(明治書院發行) — 外國語譯國文學年表 (p. 178-201) 中に日本文學のエス譯として本誌に發表された諸種の作品が掲載されてゐる。  
 ★淺田一博士著「研究室より社會へ」(人文書院發行) 法醫學方面の隨筆を主として蒐めたもの。その中「閑日月」「環境と人」「赤化と綠化」「藥のつもりで毒を與ふる先生」「アジア民族會議用語を顧みて」「エスペラントと通信事務」「綠の星」「國際的親しみを味へる外國旅行」等の諸項に於ては直接又は間接にエス語に論及したものであつて本書は興味の多い讀物の多い點とエス記事の兩方面からエスペランチストの見逃すことのできぬ書物である。(價 2 圓)  
 ★出版年鑑(東京堂版) } 昭和九年版共  
 ★出版年鑑(東京書籍商組合) } にエス新刊書の紹介あり。

### 前號寫眞説明追加

前號内地報道中の寫眞の中京都エス聯盟の清瀧への遠足の寫眞の中の人々の名前を次に掲げます。

向つて左より〔前列〕糸井潔、木村ちゑ、大原しづ子、〔中列〕一木嬢、一木誠也、杉村千代、〔後列〕服部亨、木下晴一、伊藤潤二、松山尙夫の諸氏諸嬢。

(撮影者西村勇氏)



## 關西地方風水害の御見舞

九月廿一日の關西の風水害については早速本誌（前號）上にて御見舞申上げておいたがその後豫想以上に其被害が甚大であつたことが日一日と新聞紙にて報導されたので本會としては會員各位の御被害の程度を調査するため同地方の各地方會へ被害状況を問合せ更に會員各位へは理事長より御見舞しました。その結果同地方の同志はどなたも多少の被害を蒙られた様であつたが全體として同志の御被害が割合僅少であつたことが判りよるこんでゐます。今次に被害調査の大要を掲げる。

### ◇御被害の多かつた會員各位

★八木日出雄氏（岡山）。旭川の氾濫のため浸水床上七尺、家財浸水及び流失且家屋半壊の爲着のみ着の儘にて避難し、さしあたり小橋町中屋敷 57 番地へ居をかまへらる。

★川村信一郎氏（郷里：大阪）。お妹さんお一人惨死、お一人重傷された（學校倒壊のため）。  
Koran Kondolencon kaj Simpation!

★佐々木祐正氏（大阪）。床上六尺浸水。

★中西義雄氏（岸和田）。玄關大破し書棚が倒れ書籍の汚損紛失せるものあり家族一同は近所の教會へ避難し無事。

★小川長松氏（岡山）。浸水床上五尺五寸。階下の家財全部浸水。相當の被害を蒙むらる。

★笹木健氏（岡山）。被害多大。其上大阪在住の御両親も被害を蒙られた由。

★寺井利一氏（京都府）。御勤務中の小學校舎倒壊（但し早く兒童を避難させたため一名惨死せしのみ）。

★伊藤幸一氏（大阪）。床上浸水五尺。

### ◇御被害のやや多かつた會員各位

★和田延三氏（大阪）。床上一尺浸水。

★賀根村嘉信氏（大阪）。床上五寸浸水。

★平石正一氏（尼崎）。床上五寸浸水。

### ◇御被害のあつた方（地方會報告）

★村瀬武氏（尼ヶ崎）。床上浸水五尺。家財殆んど流失、家屋半壊（尼崎エス會報）。

★吉村義久氏（大阪府）。間借中の二階出勤不在中所持品全部吹飛ばさる。（大阪鐵道エス會報）。

★岡 芳包（大阪）浸水床上二尺以上（阪大  
★野村一雄（醫エス會報）

★外山智光氏（大阪）。預先の書籍多數流失の厄にあはる。（エス誌讀者）。

◇被害僅少又は殆んど被害なき旨御返事を下さつた會員各位（順序不同）

〔大阪府〕竹若、高橋（運）、三谷、堀井、壇辻、兒鳥、松田、網谷、細川（正）、奥野、鐸木、高橋（綾）、岡田（有）、福田（國）、植木、今西、鶴我、堀田、宇都宮、徳永、岡野、山川、西村、松原、城戸崎、長井、多田の諸氏。

〔兵庫縣〕島津、宮本、名兒耶、吉田、永井、月本の諸氏。

〔岡山縣〕難波、荒田の諸氏。

〔香川縣〕中村（靜）、宮崎の諸氏。

〔三重縣〕野知里氏。

〔京都府〕井上（祥）、井澤、松田（惠）、金松、柴山、伊藤（永）、辻村、糸井、池田の諸氏。

〔和歌山縣〕須川氏。

◇學會の問合せに對し御返事を賜つた地方會は

尼崎エス會、廣島エス會、大阪鐵道エス會、四日市エス會、岸和田エス會、神戸エス協會、京都鐵道エス會、臨大エス會、京都エス聯盟、阪大醫學部エス會。

學會としましては多大の御被害を蒙られた會員各位に對し簡單ながら御見舞のしるしとして粗品を差上げることとしました。

猶個人又は地方會で上記御被害を蒙られた方々に對し應分の義捐金をお出しになるのでしたら當會で御取次の勞を致します。（勿論當會にて取次いだものはすべて本誌上に掲載します。）

財團 日本エスペラント學會  
法人

### 外國の同志よりの見舞狀

Internacia Scienca Asocio Esperantista から次の如き見舞狀が學會宛にきました。

Parizo, 24-an IX 1934-a

Tre estimataj sinjoroj,

La Internacia Scienca Asocio Esperantista emociata de la terura katastrofo, kiu subite batis vian landon, al vi sendas la esprimon de sia granda aflikto. Ĝi respektoplene partoprenas vian gravan funebtron kaj kliniĝas dolore apud la malfeliĉaj viktimoj de la neatendita kataklismo.

Tutkore via

I S A E

（以下 338 頁へ）



## 第十五回赤十字國際會議への宣傳

(附) 地方會より各地少年赤十字團へ働きかけるのが肝要

第十五回赤十字國際會議 (XV<sup>e</sup> Conference Internationale de la Croix-Rouge) が 10 月 20 日から 31 日迄東京芝區の日本赤十字社本部で開かれることになった。17 日からその準備として執行委員會が開かれ 18—19 日には赤十字聯盟理事會及代表者會が開かれた。

今度の赤十字大會は (日本赤十字社々長徳川家達公はエス語には好意をもたれた方ではあるが) 大體見渡した所各國の一流政治家や外交官によつて成立してゐるものであり實際の事務を處理する人々の中にエス語に理解のある人がないのだから今夏の汎太平洋佛教青年會大會 (その節は好村主事のあつて御世話になつた) の様に簡単にエス語が入りこむこともできぬことは云ふまでもなく又 *intervjuo* をするにしても仲々容易でないことが前々から想像された。

UEA への學會の代表たる進藤靜太郎氏が今春以來 UEA と文書によつてこの赤十字會議へ代表者をだす各國のエス會と聯絡をとる様努力されたが UEA が重要案件の山積と手不足のためか各國との十分な聯絡がとれなかつた爲この方の手がよりはえられなかつた。

記者は 10 月 16 日及 17 日赤十字本社へ出向き日程表及び出席各國代表名簿をもらひ同會議の傍聴等できるや否やを尋ねたがこれについてはすべて *malfavora* な返事をえたのみ。

それで正面からの方法はまったく絶望であつたので各國代表中の主だつた人々に *intervjui* してエス語に關する意見をたゞす方法より外手段のないことをさつた。

17 日國際聯盟事務局東京支局長徳田六郎氏 (學會評議員) を訪問した。同氏は同赤十字大會には聯盟の代表として招待されてゐるので機會をみて各國代表にエス語に關する意見をたゞしていただく様に依頼した。

19 日晚記者は植田高三、久保貞次郎の兩氏に御同伴をねがつて各國代表に *intervjui* しようと圓タクを帝國ホテルにとばした。ホテル受付で同ホテル止宿中の代表者の部屋の番號をうつしとり久保氏が鮮かな英語で各部屋へ電話をかけたが殆んど不在であつた。これは當夜はよい天氣だつたので誰しも市内見物に出掛けたものの様であつた。

それで同ホテルの玄關廣間で談笑してゐる連中を *ataki* することにきめ先づ隅の方で一人で *cigaro* をくゆらしてゐる六十歳位の老人にぶつかつた。久保君が辭を低くして話しかけた。名前をきいたら米國代表の Fennemore と答へた。記者が英語書きの名刺と英文のパンフレットを差出すとヤオラ懷中から眼鏡をだしてながめて投げすてる様につきかへしたその態度は實に不愛想なことおびたゞしい。「エス語についてきいたことがあるか」ときくと「知らぬ」と云ふ「國際語の必要如何」といへば吐きだす様な口調で「わしは英語で十分だ」ととりつく島もない。あまりの態度にホーホーの態で逃出し次に三四十歳位の若いのをねらつて英語で話しかける。Fr. Buchert といふドイツ人だと答へる。「エス語は」ときくと「今は忘れたが少年時代に獨學で習つた事がある」と云ふ。これはしめたと「どこで」「何歳の時」と矢繼早に尋ねるとフランクフルト市で 15 歳の時ならつたのだと云ふ。どんな本だといふと名前は忘れたが四六半截位の本だといふ。だんだん話してゐると日本のカナも漢字も習つたと云ふ。學會の封筒の上に書いてある漢字まじりの *adreso* を見せるとスラスタとよみあげるのには驚いた。併し記者が日本語を話してみたら自分は書物で獨習したのだから會話はだめだといふ。二年間も日本語を習つたと云ふ。やはり西洋人でも眼で習つた言葉は話せないとみえる。彼は赤十字代表ではない單なる漫遊客にすぎぬと云ふ。英文のパンフレットを渡しエス語を思ひ出してもらひたいと云つて握手してわかれた。

まだ廣間には人は居たが三四人一團になつて話してゐる所へブツかることもおつかないし時もたつたので今度は電話で「今居るが忙しいからあへぬ」とことわられたシャムの代表 Rajanakul 氏をむりに訪問することにきめボーイにたのんで部屋へ案内してもらふ。部屋へ行つたら今しがた散歩に出たととてもぬけの殻にはあきれた。廊下でバツタリ出あつた學生が久保君と面識のあるシャムの留學生 (中央大學生) で C. Snitavej 君といふ人。日本語もうまい。その中に Rajanakul 氏も歸つてくるだろうからこゝで待つたらどうかと云ふ。それで廊下でまつてゐる。その間に同君



に「エス語をしつてゐるか」と聞く「知つてゐる。自分が香港の中學にゐた時先生だつた支那人の Ng Sau Yan といふ人がエス語の話をした」といふ。「君の學校の川原教授がエスペラントをやつてゐる。又磯部醫博をしつてゐるだらう。あの人はエスペランチストだ」と話す。英文パンフレットを渡し暇に習ふ様すゝめた。その時シヤムの人二三人がドヤドヤと歸つてきた。Rajanakul 氏ではないと云ふ。誰でもかまはぬ紹介してくれと同君にたのむ。同君の紹介で 60 歳位の紳士の部屋へ案内された。この人はもと日本へも公使としてきた事のある人で今は官職を辭して遊びにきてゐると云ふ。名前は Phya Visutra Sagaradith と云ふ。エス語については十年も前にバンコクで書いた事があると云ふ。併し自分は英語で十分だと思ふ。勿論各國人はまづ自國語も習はねばならぬがその次に英語を習へばそれで用は便じると云ふ。やはり東洋の外交官らしい事を云ふ。これはシヤム語と英語で話したことである。記者はそれでは英米が横暴をきわめるし英語を用ひる限り東洋人は英米の奴隷にすぎぬぢやないかと云ひたかつたが英語は容易にでゝこない。Snitavej 君もやゝ言葉がはげしいので通譯をひかへたのでこちらの意志は十分通じなかつた。同氏はしきりに英語禮讃をつゞける。時計をみると十時を廻つてゐるので konservativa realisto なる老外交官に敬意を表して部屋を出た。やはりエス語は若い者がよい。事大思想の老人はだめだ。これでその晩の aventuro はこれ位にきりあげて歸つた。

20 日午前(發會式あり)記者は赤十字本社へ代表にあへるいゝ機會もがなと出掛けてみる。宮殿下の御臨席があるとかで警戒きわめて嚴重警官及憲兵が立番をしてゐる。横門の自動車溜の邊が警戒が少いのでそこからコソコソと中へ入つて自動車運轉手等と一緒にゐたが併し何にしても代表者達の所へは近よれさうもないので學會へ引あげた。午後一時半御足勞を願ふことにしてあつた田沼利男氏と連立つて帝國ホテルへ出掛ける。田沼氏はフランス語の先生であるから赤十字代表にブツかるのにフランス語での通譯をお願いしたのである。この日は日程では午後 2 時から東京市内ドライブとなつてゐる。やつぱり赤十字代表の連中は三々伍々打つれだつてドライブに出てしまふので手の施しようがない。やつと赤十字代表の徽章をつけた背の高い割合年若の人が一人みつかつたのでそれと立話して

ゐた日本人にその名前をたづねた。Sidney H. Brown と云ふ人で membro de la sekretariejo de la Internacia Komitato de Ruĝa Kruco だといふ。それでボーイにたのんで記者の名刺をもたせてやる。同氏がやつてきた。英語國人らしいので記者がやむをえず下手な英語で「エス語についての貴見を拜聴したい」ときりだすと。とても raŭka voĉo で耳へ口をよせて「實は自分は役員なので連日會議(準備會議をさすものならん)をやつてきたので聲がかれてこの通りだ。ドライブをやめて養生してゐる。今部屋に doktoro が待つてゐるのだから遺憾ながら又の日にしてほしい」と云ふ。これには手がつけられない事實作病でないことは明かなので折角の好機をむざむざと逸してしまふ。もはやいゝ椋鳥もみつからぬのでうらみをのんで引上げた。

今回の大會は參加國五十七代表者二百五十二名といふ多數であるがその中小國の代表は大體東京又は日本駐在の大公使又は參事官や領事といった人々で實際に來朝したものは百五十二名(同伴者 48 名大抵夫人)。でありその中の六十一名が米國代表(フィリピンを含む)といふわけであるからアメリカ英語が幅をきかせること夥しい。

潜水艇式の atako ばかりでは會議よりも東京見物に浮身をやつしてゐる各國代表をとらへることが仲々むづかしいから第二段の方法として英文で書いた手紙(その中に赤十字とエス語の關係についてのべたものでそれだけ讀んでもらつても多少の宣傳になる——久保氏が作つたもの)に英文パンフレットをそへ且つ demandaro と返信封筒を同封して主だつた各國代表及び赤十字聯盟の役員三十數名にあてゝ 23 日に發送した。恐らくは一通も返事は來ぬものと思ふ。併し彼等に赤十字とエス語との關係について注意を喚起するだけでも何等かの宣傳にならうと考へたからである。まだ會議は數日續く何とかしてもつと收穫をえたいと思ふ。昨日今日は雨降でひどく飛あるくのに不便である。(以上 10 月 24 日記。岡本)

追記——23 日晚に出した問合せの手紙に對して思ひ掛けなくも 24 日晚既に返事が一通來た。この分なら案外くるかもしれぬと思ふ。25 日には 2 通來た。まだ來ると思はれるからこれらの成績については本誌次號で紹介することにする。

25 日午後は日比谷公園で少年赤十字團が各國の赤十字代表の爲歡迎會を催した。少年赤



十字團員は全国各地から集つた千餘名の小學生（主として尋常五六年生）であるがこれらの中五百數十名が本日青年館に止宿してゐるのでこれは一つ老人ばかりを相手にするよりも純真な先のながい小學生にエス語を宣傳する方が永い將來のことを考へるとより効果的であると考へたので同青年館に關係ある久保貞次郎氏の御盡力をえて 25 日晚記者は同青年館宿泊部（同夜止宿の少年赤十字團員數四百八十餘名）を訪問宣傳パンフレットに謄寫版で刷つた赤十字とエス語の關係及びエス語の必要をのべた手紙を添へたものを各室に配布した。この三百通の手紙とパンフレットがどれだけ役だつかは疑問であるが遠い田舎から東京へきてゐるんな印象をうける少年の頭腦の一隅に「エスペラント」の六文字をきざみこんでをくことは有意義な事と考へた。殊にこれらの少年少女は團員中でも優秀な者をえらんで派遣したものと思へられるから。

記者は去る 17 日丸之内の赤十字社東京支部で開催されてゐる少年赤十字國際展覽會を參觀した。そして初めて少年赤十字團といふものが赤十字社に附隨して設けられてゐることを知つた。そしてその團員の數が日本全國で二百三十六萬餘人もある（團體數七千六百餘）といふことを知つて驚いた。

記者ももつと早くからこれを知つてをれば各地方會各位の御協力をえてこの方面から赤十字部内にエス語の宣傳をするのが最も効果的な方法であつたのにおしいことをしたと思つた。

展覽してあるものは日本の少年赤十字團員が外國の少年赤十字團員から送られたアルバム（寫眞やその他ゐるんな手藝品その他を貼つたもの）の類と日本の團員の製作品その他の物品である。アルバムや手藝品の交換には常に手紙をそへる事になつてゐるが其手紙は團員自身が日本語で書いたものを日本赤十字社の本部で（無料で）英語又は佛語に翻譯してそれを先方へ送ることになつてゐるし外國から來るものも佛語又は英語以外の國語で書いた

ものはすべて英佛語の何れかの譯文をそへて送つてくるのでそれを又日本語に譯してやるのだと。これは役員の話である。そこで記者が次の様なことを考へた。

即ち今度の赤十字會議によつて我々が教へられたことは日本全國に散在するこの二百三十六萬の少年少女を我々の味方に獲得するのが我がエス運動の將來のためどれだけ大きな効果をもたらすかわからないといふことである。横文字で書いてあれば英語だと考へてゐる之等少年達にエス語の名前をきざみつけるだけでもよい。しかもこの組織された二百數十萬の少年少女を味方にするのは大したことである。

併しこれにはどうしても地方會の各位が今後心掛けて最寄の少年赤十字團（全国各地で少年赤十字團のない所が殆んどない。土地の小學兒童か先生にきけばわかる）に働きかけその少年赤十字團の外國への通信をエス語に翻譯することを引受けてやり外國からエス語をそへさせる様に申しおくらせる様にしてつまり少年團の通信の手傳ひをして彼等に便益を與へてエス語の宣傳をするのである。

宣傳としてこれ以上効果的なものはないと思ふ。併しこの方法でやるには地方會の各位が大いに働いてくれなければならない。エス語の宣傳は足下から固めてゆかぬとだめだ。役員一人を説得してもその役員が更迭すればすぐだめになる。その例はいくらかもある。大衆の中へくひこんだものは弱い様で最も力強いものである。

そしてもしこれが全国各地の少年赤十字團で實行されるならばやがて東京の本部でも組織的にエス語を活用する様になると思ふ。（學會としてもこの件に關し各國の landaj asocioj に働きかけるつもりである）。かくして少年赤十字團を綠化すればやがて大人の赤十字社をも綠化することができよう。吾々は「エス語の宣傳は少年少女より」「少年少女は赤十字より獲得せよ」と叫びたい。（26日夕。岡本記）

(daŭrigo de sur p. 319)

Mi leviĝis. Mi eliris la ĉambron, promenadas vojetojn de ĝardeno. Malseka nokta aero penetras mian vestaĵon. Mi suprenrigardas la ĉielon. Super mia kapo steloj de Granda Urso rebrilas. Mi direktis la rigardon al la domo. Elfluas lumo el laboratorio de S-ro Jamada. La gesinjoroj avide ekzamenas, esploras pri ia alte varola objekto...eble la trezoro. Io nigra proksimiĝas al mi. Estas "Nigro", la granda hundo. Ĝi lekis mian manon. Mi daŭrigas la promenadon, metante la manon en la haroj de la hundo. (La Fino)



## KORESPONDA FAKO

規定略號等につ  
いては本年五月  
號本欄参照の事

★S-ro V. Skukan, Sl. Brod, Jugoslavujo, dez: interŝ. kun PM-kolektantoj el ĉiuj landoj, speciale el Azio k. Oceanio. Preferas rarajn rememorigajn, aera-PM k. donas I-a SHS, Balkanajn kaj Eŭropajn PM. Respondas certe.

★S-ro Matumi Nakamura (Fruktokulturisto), Sagamura, Niiharigun, Ibarakiken, Jap.; dez. krsp. kĉl. precipe k. eksterl.

★S-ro Joh. Peterse, 2<sup>e</sup> Reserveboezemstr. 14-a, Rotterdam, Holando, 27-jara presisto, 日本人と文通希望。

★S-ro Kazuo Osaki, 49 Haŝibaĉo, Nakanoku, Tokio, Jap.; dez. krsp. kun asekuristoj aŭ asekur-studentoj en Anglujo k. Usono.

★S-ro Seiŭ Sogen; Motomaĉi, Keiĵo (Seulo), Koreujo; dez. krsp. kĉl. ge-anoj.

★S-ro Rio Koshiyama, N-ro 11, Tajimacho, Asakusa, Tokio, Jap.; dez. krsp. kun eksterlandanoj.

★Ŝinjo Mazui 様。——貴方の adresu を紛失しました。御通知を。Hans Liebeck, Lohmühlenstr. 46, Berlin-Treptow, Germanujo.

★S-ro K. Aoki (26-jara kuracisto) 100-3 Nishidacho, Kioto, Jap.; dez. interŝ. IP (bfl) F k. ekst. l.

★S-ro K. C. Takin, The Capital Electricity Works; Sie-Hwa-Men, Nanking, Ĉinujo; dez. krsp. 日本人と。virina vivo, 文學美術等につき。返信確實。

★S-ro Seiĵiro Ōmura (amanta mnzikon. k. literaturon), Ŝimizu-ŝi, Kamiŝimizu, Kataha 100, Jap., dez. krsp. kĉl.

★S-ro Kurt Schicktanz, Sebnitz (Sa). Bachstr. 7. 11, Germanujo, 日本人と。

★S-ro Tamura-Tosio, Tōkyō Kōenzi 922, Jap.: 30-jara literaturisto k. amatora pentristo, dez. krsp. k. lib amantoj de Tokio kaj Kwantō-distrikto.

★S-ro Inasato-Hiromi, 25-jara lingvisto, Takasagomati 2, Oomuta-si, Hukuoka-ken, Jap.; dez. krsp. kĉl.

★S-ro Fred L. Wharff, 2000 Delaware St., Berkeley Calif. U. S. A., 日本の同志と文通希望返信確實。

★S-ro Munekazu Simizu, Iĉinokura 269, Oomori, Tokio, Jap.; 練習のため何れの方と

も文通乞ふ。(26-jara)

★S-ro Alfred Mayer, Karlsruhe, Gottesauerstr. 16, Germanujo; dez. krsp. k. japanoj, ĉinoj, hindoj aŭ manĉukuanaj.

★S-ro Ho Ŝuku-Gen (23-jara), P. O. Box 274, Ŝanhajo, Ĉinujo; dez. seriozan korespondadon k. gesamid. en Japanujo pri Esp-movado, literaturo, lingvoscienco k. interŝ E. Resp. garantiata.

★S-ro Jo Chou, Agrikultura kolegio de Nantun Universitato, Nantun, Kiansu, Ĉinujo, dez. interŝ. herbariojn per esp-ta noto kĉl.

★S-ro Yao Chou, Agrikultura Kolegio de Nantun Universitato, Nantun, Kiansu, Ĉinujo, per rekompenco kolektas la insektan specimenon de Produra, Strepsiptera kaj Zoraptera.

## ANONCO

★Lerta gravuristo, specialisto en porcelana presfako el germana porcelanindustrio, kiu ankaŭ povas fari modernajn dekorajn kaj formojn; serĉas okupon en Japanujo. Volonte mi sendas provlaborojn k. kondiĉojn. Adreso: S-ro Mase Sammerer. Self Flössberg 15, Bavarujo, Germanujo.

★千布エス大文法第一輯「エス助辭詳解——前置詞」一冊相當價格讓受たし。

中國、上海郵箱 274 號 包叔元

——334 頁より續く——

Hago, 22. 9. '34.

Geamikoj,

Per tiu ĉi karto mi sendas al vi miajn tutkorajn sentojn de granda malĝojego kaŭzata de la mizero, kiu trafendis vian belan landon dum la tajfunataka. Mi vidas en la memoro kaj fantazio viajn infanojn en la lernejoj, kiuj kiel floroj forklinis per la terura ventego. Estas granda perdo por la homaro.

Via samideanino

A. Blanco Hoevers.

(A. Hoevers 夫人は、オランダの同志で、昨年十月十九日サンフランシスコから歸國の途中横濱に上陸し、同地の同志と會談した人で上記は横濱エスペラント協會の吉田太市氏を通じて、全日本のエスペランチストにあてた見舞狀である。)



# VORTOJ de

# MACUE SASAKI

クララ會編

日本エスぺラント運動  
史上に輝く女性指導者  
同志佐々城松榮遺稿集

四六判124頁・定價 80 錢・送料 4 錢

内容の一部 ..... ■

ORIGINALAĴOJ

Klara Rondeto .....

Klara .....

Alvoko al Samideaninoj .....

Al Junaj Patrinoj .....

Virina Ĉambro, *dialogo* .....

Legaĵoj por Infanoj .....

Infanejo, *dialogo* .....

LETEROJ

KONTRIBUAĴOJ AL SENNACIULO

Stato de Nuntempa Virina

Edukado .....

Virina Movado en Japanujo .....

Internacia Virina Tago (en

Japanujo) .....

Ŝpinistinoj Venkis .....

TRADUKAĴOJ

Prozaĵoj de Seisensui Ogiŭara .....

Du komizetoj .....

La Meĥanismo de Kapitalismo ....

心ある同志よ !!!

ただしき魂の力

強き叫びに聽け

財團 日本エスぺラント學會  
法人

東京市本郷元町 ・ 振替東京 11325 番



昭和九年十一月廿五日 印刷  
昭和九年十一月一日 發行  
（毎月一回一日發行）  
ラ・レヴオ・オリエンタ（エスペラント研究）第十五卷第十一號

定價廿錢（送料二錢）

編輯印刷  
兼發行人

財団法人  
日本エスペラント學會  
東京市本郷區元町一ノ三  
台代表 大井

# エ | ス | ペ | ラ | ン | ト

## 十 一 月 號

定價廿錢  
送料五厘  
見本十錢  
年二圓卅錢

親仔で他人（單語隨筆） エス文學研究書……………	松葉菊延 三宅史平
形容詞語根 + i …………… 動いてゐるオランダ…	岡本好次 石黒 修
えくぜるつぁーろ註釋 詳註初等讀みもの……	小坂狷二 田代晃二
政治・外交（和文エス譯） 挨拶の言葉（會話の基礎）	梶 弘和 下村芳司
絲杉（對譯童話）…………… シューベルト子守唄（譜附）	青木武造 穴戸圭一

圖書目錄目下訂正版印刷中お申込みあれば出來次第送呈